

Надежда Птушкина 作
...そして鎖の端は震える...

二幕劇

注意：本作品の（商業的、慈善的、プロフェッショナル、アマチュアを問わず）公開上演は、作者の許可を得た場合に限られます。ロシア国内、国外を問わず、上演にあたっては事前に作者（ptushkina@mail.ru）に直接連絡し、許可を得る必要があります。

作者は、テキストへの変更、場面の削除や順序の入れ替え、登場人物の名前や年齢の変更、および作品タイトルの変更を一切許可しません。

著作権の侵害は、ロシア連邦の法律および国際法の基準に基づき処罰されます。

「すると彼の魂の中で突然喜びがざわめき、彼は息を整えるために一瞬立ち止まった。過去は、互いから流れ出る絶え間ない出来事の連鎖によって現在と結びついている、と彼は思った。そして彼には、この連鎖の両端をちょうど見たばかりで、一方の端に触れると、もう一方の端が震えたように思われた。」

A. チェーホフ「学生」

登場人物

アントン・チェーホフ —— 三十歳。

マーシャ —— 妹、二十七歳。

ミーシャ —— 末弟、学生。

エヴゲーニヤ・ヤコヴレヴナ —— 母。

パーヴェル・エゴロヴィチ —— 父。

リーカ・ミジノワ —— 二十歳。

ドゥーニャ・エフロス —— 二十五歳。

イサーク・レヴィタン —— 二十九歳。

ソーフィヤ・クフシンニコワ —— 四十三歳。

ドミートリー・クフシンニコフ —— その夫。

イヴァネンコ —— 二十八歳。

オリガ・クンダソワ —— 二十五歳。

ポーリャ —— チェーホフ家の若い使用人。

正体不明の婦人 —— 四十歳前後。

舞台：モスクワ、サドヴァヤ＝クドリンスカヤ通りにある二階建ての屋敷。
。当時チェーホフ家が賃貸していた。

時：1890年4月21日。

第一幕

俳優諸氏、演出家、美術家、その他この作品に関わる全ての方々への注記。
。この作品に歴史的な類似や暗示、意味深長なサブテキスト、センセーシ
ョンや危険な解釈を探さないでください！作者にはそのような才はありません。

……ただ、かつて作者は小さな少女でした。目を閉じて、あの「風にさら
われた」人生について何時間も夢想しました。そして今、大人になった女
は、あの小さな少女の夢想を表現しようとしています。それもまた「風に
さらわれた」少女の夢想を。風は私たちの昨日をも、今朝の無意識の歓喜
の瞬間をも、ほんのつい先ほどあなたに投げかけられた、妙に考え込んだ
男の視線をも、さらっていくのです……

おお、慈悲深き神よ！私たちの感情が風のように非物質的であるのは、ま
さにそれらが私たちを照らすその瞬間に、より意識的に大切にするためで
はないのでしょうか？……

私の初恋は、同級生でも、兄の友達でも、近所の男の子でも、映画のスタ
ーでも、ロベルティーノ・ロレッティでも、フィデル・カストロでもなく
、作家チェーホフでした。それは現実的で熱烈な、夢想的で官能的な、情
熱的で無我夢中の、矛盾と希望に満ちた恋でした。私は肖像画ではなく、
生きた男を夢想していたのです。彼がどう動き、どう微笑み、声の音色や
抑揚がどんなものかを知っていました。私は彼の身振り、その開かれた、

素朴で信頼しあえる顔の表情、近視のせいかもしれない、無防備で緊張した考え深い眼差しを愛していました。

有名な女優の家で、母が私に囁きました。「あれがチャーホフの妻よ！」重々しく、年老いた、しかしどこか特別な女性。伝説の重荷が生きた肩にどれほど重いのか、私にどうして分かりましょうか？

彼の妻だ！そして私は、彼の存在の近さに興奮と陶醉を覚えます。彼の妻が、ここにいる。ならば、彼もまもなく入ってくるはずだ！その時、私にとって時間や空間や日付など、何の意味があったでしょう？それがどうして可能なのか、彼は若く、彼女はとても年老いているのに、などとは思ってもありませんでした。ましてや彼の年齢など、気にも留めなかったでしょう！

そして私は興奮し、息を呑み、熱が出たり寒気がしたりし、絶対的な予感——彼が今まさに入ってくるという予感——に震えています！彼は私を、皆から離れてロッキングチェアに座る、たまらなく美しく、愛に満ちた私を見つけるでしょう……そして一目惚れし、永遠に愛するでしょう！私の祖母は言っていました。「神に望みを託せ、しかして己も怠るなかれ！」私は「怠らず」努めました。七歳の私は、今まさに入ってくる彼のために、自分のポーズが魅惑的であり、視線が優しいものであらうと努めました。そして、すぐ近くに座っていた彼の妻に対して、良心の呵責に苛まれることもありませんでした。

あの時、彼はついに現れませんでした。あたかも意図したかのように、誰かが絶え間なく出入りしていたのです。そしてそのたびに私は衝撃を受けました。その後も長い間、私は彼の妻が訪れていたあの家に向かって散歩に出かけ、偶然の出会いを期待し続けました。なぜだか私は容易に彼をネフスキー通りやヴォスタニヤ広場に「書き込み」、いつか彼が路面電車のステップから降りてくるのを待っていました。ああ、私はどれほど彼との出会いに備えていたことか！

そして八歳の時、私の心は打ち砕かれました！学校の授業で、「ヴァーニカ・ジュコフ」の話进行分析した後、私はチャーホフがもうこの世にいないことを知りました。私たちの人生が重ならなかったという事実は、今でも私の意識には収まりません。

しかし、大きな愛は時間も空間も日付さえも支配します。死んだベアトリチェへの愛がダンテを天才にしました。『神曲』の全ては、ただ最愛の人との出会いを夢想したものに過ぎません。ダンテはもっと簡単でした。

魂が不滅であることは、彼にとって自明のことでした。彼はベアトリーチェを現実的で熱烈な愛で愛していたから、彼女を恋しく思ったのです。私もそうやってチェーホフを「恋しく」思いました。しかしダンテはもっと楽でした。彼はベアトリーチェとの再会を信じ、その出会いを待ち焦がれて恋しく思ったのです。

おお、慈悲深き神よ、今、どこに、どこに、あの男たちはいるのでしょうか。平日でさえ、あれほど仰々しく装っていた男たちは？どこにいるのでしょうか、彼らの作法は、穏やかで、高貴で、慎み深く、日常生活でも激動の中でも同様に。女性への敬意と教養は？あの魅惑的で、とらえどころのない、秘密の罪深さは？あの美德は、あまりにも明らかに遍在していたため、それ自体はほとんど平凡な特質に見え、人に重要性を与えることはできませんでした。美德を超えて、才能や知性、魅力や限りない利他主義、英雄的行為や献身、輝く機知や百科事典的な知識、地獄的な魅力、あるいは運命的な状況での不動心が必要とされました……

そして、私の子供時代の夢の女性たちは、今どこにいるのでしょうか？神経質で繊細で、ゆったりとしていて、優雅で誇り高い女性たち。情熱は深く、その表現は抑制されている女性たち。常識は愛の苦しみを軽視せず、むしろ深める女性たち。そしてその愛は常に義務、名誉、利他主義、神の御心への信頼と織り交ざっている女性たち。家にいる間も、彼女たちは私たちが外出する時よりも入念に髪を整えました。そして彼女たちのレースは、黄ばみながらも新鮮に輝いていました。彼女たちのレースの永遠の秋！そしてそれぞれが、愛、希望、期待、苦しみ、忍耐の経験によってのみ獲得される、独自のスタイルと雰囲気を持っていました。そして彼女たちは、高価な毛皮のように愛に身を包み、少し倦怠感を帯びて、女王のように見えたのです。

そしてどこに、どこに、慈悲深き神よ、ろうそくに照らされたこれらの部屋は息づいているのでしょうか？人生、愛、死がそこにある部屋は？そして永遠なるものが、絶え間なく、刹那的な存在の細部と結びついている部屋は？あたかも永遠と刹那が、二つの連結された器の中にあり、絶え間なく一方から他方へと流れているかのように。

そして演劇においてのみ、風にさらわれた瞬間を、何度でも無から呼び起こすことができるのです！これらの瞬間は幻想なののでしょうか？哀れな真実らしさと、生きた俳優たちの真の感情——花のように美しい感情——との混合を、確信をもって幻想と呼ぶことができるのでしょうか？

おお、慈悲深い神よ、どうかこの狭い玄関を私に取り戻し、留めさせてください。二階へと続く階段が、等しい二つの、かなり狭い部分に分けています。階段の段は赤いカーペットで覆われ、真鍮の光る棒で固定されています。手すりは同じく赤いベルベットの房飾りで覆われています。玄関の右側は空いています。左側には木製のハンガーラックがあります。観客の方を向いた窓の、大きくて深い窓台は、明らかにハンガーラックの脇の台として使われています。

右側にはドアがあり、玄関と台所へ通じています。左側はアントン・チェーホフの書斎です。

書斎は広く、中庭に面した二つの窓があります。窓にはカーテンがかかり、その上には庭木の裸の枝が見えます。暗い壁紙、高いタイル張りの暖炉。書き物机、本棚、テーブルクロスのかかった楕円形のテーブル、その周りの肘掛け椅子とソファ、すべて白いカバーがかけられています。床には絨毯。壁には写真や小さな絵画。多くの灯油ランプが、様々な形や大きさに置かれています。書き物机の上にはドラゴン型の燭台。左の壁には更に二つのドアがあり、アントンとミハイルの寝室へ通じています。

部屋の中央には、開かれた合板のスーツケース、紐で縛られた本の束、肘掛け椅子やソファの上には雑誌、新聞、書類の綴じ込みがあります。

そして薄暗く、静かで、モスクワの四十の四十の教会の鐘が鳴り響いています。

そして全てを照らすのは、玄関の窓台に置かれた一本のろうそくだけです。

そして、唯一の生命は、玄関で床を拭き終えたポーリャです。

そして、まるで魔法の絵のように、アントンの机の上の二本のろうそくが自ら灯り、彼を照らし出しました。彼はフェルトのブーツを履き、マフラーを首に巻きつけています。彼は丹念に、真剣に、責任を持って、書類をファイルに綴じ込んでいます。出発前、あるいは死を前にしたかのように、自身の郵便物の整理に没頭しています。

鐘の音がやみます。そして代わりに、遠慮がちに、次第に大胆に、別の日常的な騒音が響き始めます。アントンが咳払いをし、ポーリャが雑巾を引きずり、マーシャが階段を降りて足音を立てます。彼女は、縞模様の暗いドレスを着て、十代の少年のように見え、朝から既に念入りに髪を整えています。

マーシャ：（ポーリャに）なぜ暖炉を焚かないの？家がすっかり冷えきってる！ああ、何てべたついた寒くて遅い春なの！薪の出費がどれほどかかるか！なぜ暖炉を焚かないの、ポーリャ？

ポーリャ：おはようございます、お嬢様！お父様が暖炉を焚くのはお止めなさいと、掃除をしろとおっしゃいました。

マーシャ：またお父様が仕切ってるのね！おはよう、ポーリャ！ご自分のところで指揮を執ってください！この掃除にこだわって！

ポーリャ：ですから、私としては...

マーシャ：静かに！アントン・パーヴロヴィチが咳を...気のせいかしら？

ポーリャ：お父様は古い考え方で、アントン・パーヴロヴィチがお出かけになった後では掃除はできない——それは縁起が悪い、とおっしゃいます。

マーシャ：（聞いていない）それとも咳をしてるの？（心配そうに行ったり来たり）どこからこんなに隙間風が入ってくるの？どうしてドアがきちんと閉まらなくなったの？そしてすべてが一度に！すべてが壊れ、割れる！家は、アントーシャを離したくない、離したくないんだわ！

ポーリャ：（床を拭きながら独り言）全部、お父様の迷信ですよ。

マーシャ：（二階の物音に耳を澄ませて）神様、どうか忍耐を私に！家具を動かしてるの？何のために？一週間中、ここで仕切って！（泣きそうな声で）もう疲れたわ。アントーシャの出発の日でさえ、誰にも休ませてくれない！それなのにアントンは仕事してるの！いつも仕事してる！そして誰も、誰もそれを理解しようとしない！

二階で何かがガチャンと音を立て、マーシャは階段を駆け上がります。エヴゲーニヤ・ヤコヴレヴナが、羽根をむしった鶏を手に、台所から飛び出てきます。

母：（ポーリャに、低く）また何かあったの？

ポーリャは両手を広げて見せる。

母：（熱心に）カザンの生神女、母なる女王よ、救いて給え、憐れみ給え！（上に向かって）何があったの？（返事がなく、さらに大声で、恐慌を帯びて）マルーシャ！マルーシャ！マルーシャ！

マーシャ：（上から、低く、しかし強い苛立ちを込めて）あなたまで騒がないでください、お母さん！

母：怪我はしなかったの？

マーシャ：いいえ、いいえ、大丈夫です。

母：（十字を切り、羽根をむしった鶏で自分を聖別する）全く、私の可愛い子が自分を大事にしない！

ポーリャ：パーヴェル・エゴロヴィチは本当に真面目で、全てを見張って、全てに命令なさいます。

母：全て彼が、全て彼が！（台所に引っ込む）

マーシャ：（上から）ポーリャ、そこは終わらせて、こっちを手伝って。

ポーリャ：ただいま、お嬢様、ご心配なく、ただいまさ。

父：（かすかに見える）マーニャ、怒るなよ、あれは...人々が別れに来るんだ...まあ、どうしても...あれだ。

マーシャ：仕掛ける必要があったの！一週間後には別棟から出て行くのに！（一階に下りてきて、手早く床を見渡し、何かを直し、窓台のろうそくを吹き消す）

マーシャ：ミーシュカがろうそくを買うと、いつも高いのを買ったがる。

ポーリャは二階へ上がる。

父：（上から）ポーリャ、こっちへ来い！秩序が家であり、無秩序が地獄だ！

マーシャ：地獄、ソドムとゴモラ...（二階へ上がる）ソドム・ソドム・ゴモラ・ゴモラ...（笑う）

アントンの窓の下で犬が激しく吠え立てます。そして見事な若い声：「コルボ！コルボーシュカ！コルボーシェチカ、私に吠えるのかい？私にかい？ありがとう！ああ、ああ、ああ...まあいいよ、いい子だ、いい子だ、足で汚さないでくれ！三日でここじゃみんなに忘れられたよ、君だけじゃない！」それに応える忠実な鳴き声。アントンは笑い、活気づき、玄関へ急ぎ、ドアを大きく開けます。

アントン：ジャメ！

そして、玄関に、若々しく、荘厳に美しい女性が足を踏み入れます。まるで、重厚で優雅な器に、嵐全体が揺れているかのようです。

リーカ：（興奮して息を切らしながら）許してください！さもなければ今すぐ振り返って、永遠に去りますから！

アントン：（ドアを念入りに閉め、小声で）素晴らしく、魅惑的な、四乗のリーカ！何の罪があるのか分かりませんが、どうか...ちょっと待って、今ひざまずきますから...（周囲をちらりと見渡し、片膝をつく）僕のこの痔の状態で！慈悲を、神のごとき、美しき、若き方！あなたにご迷惑をおかけしたことを、喜んでお詫びします、でもこれっきりにしてください！

リーカ：いつになったら私に真面目になってくれるの？あなたは嫌な人ね！いつも？ちょっと待って、立つのは許していません。水曜日、私たちは一緒に劇場に行く約束でしたね、覚えていますか？...あなたの代わりにミーシャが来ました。立たないで！どうぞ、マーシャに見せてあげましょう！ミーシャにあなたのことを尋ねました。最愛の兄への賛辞と、あなたが忙しいという、哀れで説得力のない言い訳。私は怒って、木曜日にも金曜日にも来ませんでした。

アントン：（早足で）あなたの不在は、毎回私が気づいていましたよ！

リーカ：私は怒りで、もちろん、居場所がありません！

アントン：私はあなたがとても、とても寂しかった！

リーカ：やっと！パーヴェル・エゴロヴィチ...パーヴェル・エゴロヴィチ！私の健康を尋ね、あなたに別れを言いに来るかと思いをよこすの！さようなら！（振り返り、去ろうとするふりをする）

アントン：（素早く彼女の足をつかむ）おっと、おっと、君の足を捕まえたぞ！（彼女のブーツを脱がせる）さあ、もう片方も！（二つ目も脱がせる）

リーカ：（慌てて）立って、立って！マーシャが来る！

アントン：マーシャに見せてやろう、君が僕をどう苛めているか！

リーカ：立ってください！（彼を引き上げようとする）

アントン：（立ち上がる）さあ、僕の部屋へ！君を僕のそばの肘掛け椅子に座らせるよ。（彼女の肩掛けを脱がせる）そこなら、君が僕を苦しめるのに心地いいだろう。（肩掛けを軽く振り、丁寧に掛ける）

リーカ：（不安そうに）それは決まったの？

アントンは彼女に腕を差し出す。

リーカ：今日なの？

アントンは彼女の腕を自分の腕に通す。

リーカ：それでもやっぱり、献身の道を歩み始めるの？

アントン：（彼女を書斎へ導きながら）もう歩み始めたよ。感じるかい？
家中に鶏の匂いがしてる。妹、母、父、使用人、みんな大騒ぎだ！

書斎に入る。

リーカ：寒いわね。みんな健康？

アントン：この苦難の世界は、神に感謝、みんな元気だよ。

リーカ：みんな家にいるの？

アントン：学生は今日、最後の試験を受けてるよ。（書類の山から一つの肘掛け椅子を空けて）どうぞ！

リーカ：邪魔だったら、二階にや追いやってね。（座る）

アントン：必ずそうするよ。よろしければ、君とおしゃべりしながら仕事
もできる。ここを片付けなきゃならないんだ。

リーカ：じゃあ、今二階に行くわ。あそこはもう起きてる？

アントン：とっくに起きてると思うよ。

リーカ：私は歌うわ、人魚のように。でもあなたは縛り付けなくてもいい
わ。何の努力もせずに聞き流せるから。

アントン：（書類を扱いながら）君はコケットだね、リーカ、そして恥知
らずなコケットだ。（書き物机を抱え込む）これが僕の鎖だ！そしてそれ
らは軋み、君の魅力のせいで今にも切れそうだ。

リーカ：じゃあ、私からそんな遠くへ逃げるの？（立ち上がり、大きな地
図に近づく）シベリア...サハリン...（地図の上を指でなぞる）チェーホフ
...チェーホフ...私があなたについて行きたいって言ったら？

沈黙。

リーカ：チェーホフ、あなたは私の言うことを少しは聞いている？

アントン：もちろん聞いているよ。でも、もう一度言ってくれないか？

リーカ：あなたが去ったらすぐに、恋愛をして、人生を浪費し始めるって言ったのよ。

アントン：前もっておめでとう。（咳をした）

リーカ：（挑発的に）アーメン。

沈黙。

リーカ：じゃあ、ご家族に挨拶してくるわ。

アントン：君がこんなにすぐに僕を恋しく思うなんて！

リーカは玄関に出て、階段のそばに考え込んで立ち、ハンガーラックに歩み寄り、自分の肩掛けを取り、ポケットに小さな本があるのを見つける。考え込む。本を調べ、書斎のドアを振り返り、決意して肩掛けを元に掛け、急いで戻る。ドアをノックする。

アントン：どうぞ！

リーカ：（本を差し出しながら入ってくる）これ！忘れるところだった。家族が返して、お礼を言ってるわ。叔母も母も感動して泣いたの。みんな私にせがむの；あなたのチェーホフはなぜ刑務所へ行くのかって？私のチェーホフ、少しだけ私と話して！

アントンは書類を脇にどける。

リーカは再び座り、興奮して手を握りしめる。

リーカ：なぜ？正直なところ、私には分からない。ロシアにとってこれは打算的ですからあるわ。今、あなたは真剣に読まれている唯一の人よ。人々はあなたを信じてる！崇拝してる！ロシア中があなたに耳を傾けてる！あなたは書くべきなの、書く、書く...そうでなければ...あなたにはその権利がないの...いいえ、いいえ、サハリンへ行く必要があるなら！あなたに分かっているんでしょう！必要なら、そう。でも、なぜあなたが行くの？正直な献身的な人はたくさんいるけれど...才能は劣っていても？私...私は馬鹿なことを言ってる？

アントン：（優しく）リークシャ、僕は一生、ワインも吸わず、結婚もせずに済むなら、そんな言葉を聞くためにそうするよ。

リーカ：シベリアはこんなに広いの！そしてあなたは、シベリア中を、幌馬車で！快適さを愛するあなたが！肉体労働に不向きなあなたが！そして

氷のように冷たいシベリアの川を！あなたのあの健康で！これは狂気の沙汰よ！あなたは戻ってこないんじゃない？

アントン：僕を殉教者にしないでくれ、リーカ！

リーカ：（彼のところに飛び寄り、顔を近づけて、不適切に激しく大声で）私はあなたが血を吐いて咳をしているのを知ってる！三ヶ月前に気づいたの！どうだ！

アントン：（早足で）リーカ、黙って！妹や母には一言も！

リーカ：（声を潜めて）あなたの兄ニコライが肺結核で死んだことは、あなたにとって重大な警告ではないの？どうしてあなたは自分にそんなに無慈悲なの？そして他人にも？...

アントン：リークシャ、十分だよ、君は誇張しすぎだ。これは何でもない...（人差し指を立てて、皮肉っぽく）むしろいいことだ。これは自分自身に厳しくし、時間を大切にするのに素晴らしい効果がある。

リーカ：ああ、神様！

アントン：君はまだとても若い、リーカ！そして君はまだ死について理解できない。働かなければならない、働かなければならない...そしてこの人生で、確かで、確実で、賢いものは何もない。

沈黙。

リーカ：ああ、神様！（部屋の中を行ったり来たりし、窓のそばで立ち止まる）窓から風が入ってくるわ！（暖炉に寄りかかる）暖炉は冷たい。（離れる）そしてドアのそばも風が入る。今日はどうしたの？

アントンは黙って、自分の寝室からリーカのために毛布を持ってくる。

リーカ：メルシー。（毛布にくるまり、肘掛け椅子にしっかりと腰掛ける）

アントンは仕事をする。

リーカ：ついこの間、復活祭だったのにね！パーヴェル・エゴロヴィチが家中に香をたくさん焚いたの！家は人でいっぱいだった。みんな狂ったように笑ってた！断食明けの食事をして...クレムリンに行って...教会を巡って...礼拝を聴いて...聖歌隊...どこかの教会に入ったの...あなたは見覚えのある画家を見つけて尋ねたの：「これは何という教会ですか？」すると彼は振り返り、催眠術にかかったように私を見つめ、あなたではなく私を見

ずに、しかしとても真剣に、重々しく答えたの：「あー、ち、ち、ち、ちくしょう、知らねえ！」私たちは我慢できず、大笑いして教会から逃げ出したわ。それはあったの？なかったの？チェーフ？

アントンは答えず、書類をいじっている。

リーカ：救世主ハリストス大聖堂の夕の礼拝に行ったわ。あなたの亡き兄が、聖歌隊席の上の壁を描いたのを見たわ。そしてあなたが言ったの——ニコライは死んだけれど、救世主ハリストス大聖堂は、本質的に永遠に立っている、と！そしてニコライの壁画はすでに永遠のものに属している、と。それから私たちは石橋の上に立って、突然、鐘が、かーっ！と鳴り響いたの！（鼻歌を歌う）ディン・ディリ・ドン・ドン...ディン・ディリ・ドン・ドン、ディン・ディリ・ドン・ドン...（沈黙）不思議だわ、今夜にはもうあなたはここにいないのね。そして、もう二度とこの家に戻ってこないのね。あなたは...この家が惜しくないの？

アントン：確かに、ここの別棟は便利だった。大家は私たちに干渉しないし、私たちは大家に迷惑をかけない。このタンスの前に、私たちは十軒以上のアパートを変えたよ。

リーカ：タンス！ああ、私には小さなゴシック様式の城に見えるわ！何か特別で、モスクワの家とは違う！なぜか赤い！ヴェネツィアやナポリにありそうな家ね。白い雪に覆われて、なんて素敵だったことか、私が初めてあなたの家に来たあの晩は！覚えてる？

アントン：（温かく）覚えてるよ、リークシャ、もちろん覚えてる。

リーカ：そしてここに他の人たちが住むのね。彼らはみんな、何もかもが違おうだろう。そして私たちのことは知らないだろう。私たちに関心もないだろう。あなたは惜しくないの、アントン？

ドアにマーシャが盆を持ってやって来る。

マーシャ：アントン、開けて！

アントンが開ける。

マーシャ：（頬を差し出して）おはよう、兄さん！よく眠れた？リカーカ！もう来てたの？（リーカに近づき、頬にキスする）コーヒーはどうする？

リーカ：こんにちは、マーシャ！気にしないで、朝ごはんは済ませたから。

マーシャ：（盆を置き、アントンに）よく眠れた？寒いわね。熱いコーヒーを飲んで。ミーシュカは食べもせずに飛び出していったわ。母はそれで朝からずっと嘆いてるの。

アントン：座れ、マーシャ！一緒にコーヒーを飲もう。今、もう二つカップを取ってくる。

マーシャ：いいえ、いいえ、私は時間がないの。あなたのために暖炉を焚くわ。（暖炉のそばで動き回り、リーカに）アントンの相手が退屈になったら、二階に上がってお父さんのところへ行って。お父さんは君が好きなんだ。お年寄りと一緒にコーヒーを飲みなよ。もう君のことを尋ねてたわ。うちは地獄よ。（アントンに、心配そうに）はっきり言って——古い上着を詰めるの？それとも新しいの？

アントン：（笑う）古いのでも大丈夫だよ。（ろうそくの火でタバコを乾かす）いいかな？

リーカ：どうぞ！

マーシャ：（タバコを取り上げる）空腹で吸わないで！（彼にキスする）よく眠れた？ちゃんと聞いて良かったわ。さもないと母が新しいのを詰めるって言うのよ。しかも反論して！（リーカに）どうして来なかったの？憂鬱だったの？最近、憂鬱そうね。手紙を書こうと思ったけど...自分でも分かるでしょ、すごく慌ただしくて、教員学校にも行かなくて...恨まないでね。（リーカにキスする）痩せたね、やつれたね...（アントンに）じゃあ、新しいの？古いの？（暖炉に戻り、火をつけ続ける）

アントン：新しいの、新しいの...大忙しだね、マルーシャ・パヴロヴナ！忘れないでくれよ、君が聖名祝日に縫ってくれた赤いブラウスをね！不穏な人物になりたいんだ。それと肝油！そして鉛筆をたくさん、何よりも！

マーシャ：（背筋を伸ばす）もうすぐ暖かくなるわ！（ランプに火をつけ、涙ぐみながら）亡きコーリヤが、このぷっくりしたランプについて、もうすぐ小さなランプを十二個産むだろうって冗談を言ったの。

アントン：（妹を抱きしめる）マーニュネチカ、落ち着けよ、どうしようもないじゃないか...君は疲れてる。君は僕たちの主役だ。君なしではお粥も煮えないよ。

マーシャ：（まだ涙ぐみながら、すすり泣いて）知ってる、レヴィタンがパリから戻ってきたわ。見てなさい、きっとあなたを見送りに来るわ！覚えてる？彼はあなたと一緒にいきたいって言ってたの！リーカ、暖炉のそ

ばに来て暖まりなよ。一日中ここにいるの？残って、残ってよ。もうしばらくアントンに会えないんだから！なんて変化なの！（部屋中を歩き回り、全てのランプに火をつける）立派なタンス！ありがとう！ありがとう！このタンスの中で、私たちの青春時代が過ぎていったの。四年間、私たちはここで笑い、恋をし、働いたわ。ここでアントンは有名になったの。ここに私たちの福音記者が現れたの！年配のグリゴローヴィチが来て、アントンに言ったの：「あなたは新世代のすべての文学者より優れている！我々ロシアには批評がなく、それであなたは正当に評価されていない。そして私たちは当時、アントンの文筆を真剣に受け止めていなかったの。いつ彼が医者になるのかと待っていたのよ！この住まいには、天才的なチャイコフスキー、オストロフスキー、コロレンコ、プレシチエーフ...そしてレヴィタンが訪れたのよ。ああ、もしアントンがサハリンへ行かなければ、私たちは決してあなたと別れなかったでしょうね、愛しい古いタンス！」

アントン：思い出よ、汝の長き巻物を前に広げる！

マーシャ：心が不安で、胸がドキドキするわ。でも私は気持ちに負けない！いいえ！今は誰も自分の感情を考えるべきじゃない！大事なのはあなたよ。でも忘れないで、アントン、あなたがいない一分一秒、私は狂ったように心配するわ。自分の身を大事にして、道中、せめて一日おきに手紙を書いてね。さもなければ、全部放り出して、あなたの後を追いかけてから！

アントン：まだ出発してないのに、君はもう泣きそうだよ。

ポーリャ：（ドアの向こうから）マリヤ・パヴロヴナ、いらっしゃいますか？

アントン：おはよう、ポーレンカ！お入り！

ポーリャ：（入ってくる）マリヤ・パヴロヴナ、エヴゲーニヤ・ヤコヴレヴナが呼びです。

リーカ：（優しく）こんにちは、こんにちは、ポーレンカ！

ポーリャ：お嬢様がお通りにになったのに気づきませんでした！こんにちは！アントン・パーヴロヴィチ、郵便が届きました。

アントン：ありがとう、ポーレンカ！（彼女から新聞と手紙を受け取る）

ポーリャは去る。

マーシャ：（リーカに）二階で待ってるわ、リークシャ！（去る）

アントン：コーヒーを飲んで、リーカ！

リーカ：あなたが飲んで！冷めるわよ！飲んでよ！あなたのカップから一口だけ飲ませてくれるなら。

アントン：ダメだ。インフルエンザなんだ。

リーカ：あなたからもらって死ぬなんて、光栄だわ。

アントン：死にはしないだろう。咳をして、鼻水を垂らして、僕を嫌いになるだけだよ。（新聞に目を通す）「退屈な話」がまた酷評されてる。

リーカ：見せて！

アントン：やめとけ！批評を読んだら、君の若い頭の中にゴキブリが湧くから。

リーカ：せめて一分だけ真面目になれないの？

アントン：（リーカの手を取り、じっと彼女を見つめる）最後に何を僕に言いたいのか？

長い沈黙。

アントン：金髪で灰色の瞳のリーカ！（咳き込み、彼女から離れる）

リーカ：マーシャの言う通りだわ。

アントン：マーシャの何が正しいって？

リーカ：あなたはタバコを吸いすぎる。

アントン：僕には悪癖が多いんだ、リーカ！酒を飲むし、女が好きだ。

リーカ：良くないわ。

アントン：（長い間、じっとリーカを見つめる）ああ。ひどいもんだ。（書類に戻る）

リーカ：ええ、駄目な人生だわ！私にもタバコを一本ちょうだい！

アントン：（書類から目を離さずに）叩くぞ、ミジュコワ！それかお父さんに言いつけるからな。君がタバコを吸うなんて！それは、コンポートに塩漬けキュウリを入れるようなものだ！

リーカ：一度だけ偽善をやめて、正直に認めなさいよ——ただタバコが惜しいだけでしょ？

アントン：そうだ、僕は計算高い人間だ。でも君も正直に認めなさい、ただ偉大な作家のタバコを吸いたいという虚栄心からだろう！やらない！

沈黙。

リーカ：偉大な作家さん、今、この世で一番何がしたい？

アントン：（すぐに）怠惰だ！（親しみを込めて）そしてサハリンに行かないこと！全部くそくらえにすること！そして君と腕を組んでパリを歩くこと！しかし...何故か手紙に目を通さなければならない、などなど、そんな感じだ。しなければ、しなければ、しなければならんだ、リーカ！

リーカ：（素早く彼のカップから一口飲む）やっぱりあなたのを一口盗んだわ。今、あなたが何を考えてるか分かったわ！もう誰の忍耐も試したりしないで、二階へ行くわ...パーヴェル・エゴロヴィチのところへ。（ドアの方へ行く）

アントン：（立ち上がる）リーカ！

リーカは立ち止まり、振り返らずに、待つようにして固まっている。

アントン：そうだ、リーカ！上で言ってくれ、薬には触らないようにと！自分で詰めるから。それは僕の担当だ。

リーカはうなずき、笑い、振り返り、少し待って、何も待たずに、二階へ上がっていった。アントンは書類に戻ったが、ぼんやりと見つめ、よそ事を考えていた。エヴゲーニヤ・ヤコヴレヴナが静かに入ってくる。

母：具合が悪いの、アントーシェンカ？

アントン：（驚いて大きく震え、慌てて立ち上がり、母を抱きしめる）自分で病気になり、自分で治すさ。お母さんはどうだい？

母：（ため息をつく）無駄にマーニャとサハリンなんて考えたんだよ。何が可笑しいって言ったの？夜に降りてきて、君がゴホゴホやってるのを聞いているんだよ。全く、亡くなったニコーレンカの臨終前みたいに。ゴホ、ゴホ...君の勝手だが、行かない方がいいよ！商人が言ってたよ、シベリアには人殺しや逃亡者の悪党ばかりだって。やっと少し楽に暮らし始めたところだよ。（涙ぐむ）ニコーレンカが死んでから、まだ一年も経ってない...行かないでくれ、アントーシェンカ、行かないでくれ、息子よ！人殺しが怖いんだ！

アントン：まあ、お母さん...ピストルを持って行くよ。

母：（熱心に十字を切る）神よ、お救いください！君が誰かに撃てるのかい？みんな私に嘘をつくんだ！本当に行くのかい？

アントン：行かなきゃならないんだ、お母さん。

母：お父さんと毎日君のために祈るよ。でも行かなきゃ良かったのに、それはそれは素晴らしいだろうに！リーカちゃん、見てごらん、朝から来てるよ！君がいないと、彼らの楽しみは全部台無しになるよ。帰ってきたら、彼女は結婚してるかもしれない！そういうこと、あるんだよ？あんな妻は誰にでもいいものだ！面白いし、教養もあるし、思いやりがあるし...それに自分で稼いでもいる！ただ恥ずかしがり屋だね。私たち夫婦は好きだけど、君たちはもっと活発なのを好むんだね！どうしてうちのマーニャは結婚しないんだ？若くない、二十八歳だよ。どうも君たちは、もう私のものじゃないみたいだ。私の天使！療養したらどうだい！休むんだ！仕事で自分を酷使しすぎたよ。もちろん、君の仕事は頭脳労働で、昔、お父さんが店でやってたような重労働じゃないけど...それでも...無理しないでくれ、神様お許しを！

この終わりのない独白は、長く続くベルの音によって遮られる。

ポーリャがドアを開ける。

玄関にレヴィタンが入ってくる。派手で、完璧に装い、最新のパリファッションで、しかし度を越して最新の。そしてステッキを持っている。

レヴィタン：（絵になるポーズを取り、大声で）ワニどもお！（ひどく舌足らずで、「ル」が「リ」になり、さらに「シ」が「ヒ」になる）

アントン：（書斎から飛び出し、両腕を広げて）ベドウィンが来たぞ！

大笑いし、抱き合い、押し合い、二人ともひどく満足そうだ。

レヴィタン：くそっ、なんてこった、なんて元気そうなんだ！もう自分を治療するのはやめたのかい？

アントン：パリジャン、全てのパリジャンの中で最もパリジャンらしい！

リーカ：（二階から駆け下りる）アガスフェル！

レヴィタン：（詳しく、熱烈に彼女の手にキスする）神のごとき方、こんにちは！こんにちは、神のごとき方！

リーカ：（嬉しそうに）あなたはビロードのブラウスをやめたのね！でも瞳は同じね！火山のように、運命的に！

レヴィタン：笑え、笑え、みんな！でもポレノフは俺をモデルにキリストを描くんだ！

マーシャが階段を急いで降りてくる。

レヴィタン：（彼女に駆け寄る）神聖なる天！マドモアゼル・マリ！（彼女の手には敬意を込めてキスする）マリヤ・パヴロヴナ！目がくらむほど美しくなった！

アントン：縁起でもない！

マーシャ：お帰りなさい！お帰りなさい！お帰りなさい！（彼の両頬に三度キスする）

レヴィタン：みんな元気か？

マーシャ：神に感謝！

レヴィタン：モスクワがどれほど恋しかったか！君たちの愛しい家が恋しかった！『温かい友人の挨拶が予期せず私を迎えた場所、そこには世俗の堅苦しい退屈も、カルタも、空虚な人生と切り離せない卑劣なおしゃべりもない、しかし日々は労働の中で過ぎる場所』。パリでは君たちだけが恋しかった！恋しかった！

マーシャ：でも、私たちはここを引き払うのよ！そう、大家さんはもう私たちの別棟の賃貸広告を出したわ。月曜日から、アパート探しという苦しい旅が始まるの。だから、もし何か、どこかで、何か聞いたら...

レヴィタン：この世の全ては終わるんだ！ああ！

マーシャ：もちろん、ここはすごく便利だったわ！そして私たちはみんな、この可愛いタンスに愛着を持ってた！でも...お金がないの！アントーシヤは十二月までいない！私たちは二週間後にダーチャへ行くの。そしてダーチャ代と、空っぽのアパート代の両方を払うなんて、あなたも分かるでしょ...

アントン：マーパは大忙しで、それでご機嫌斜めなんだ。彼女もリークシヤも、友達全員も、三ヶ月間、奴隷のように僕のために働いてくれた！ルミャンツェフ図書館から出てこなかった！サハリンについての書き写しをしてくれたんだ。どうやって彼らに報いればいいのか分からない！きっとあの世で炭でだろうな！

その時、皆は、書斎の戸口にずっと立っていて、エプロンの端で目を激しくこすっているエヴゲーニヤ・ヤコヴレヴナに気づく。

レヴィタン：（彼女に勢いよく駆け寄る）エヴゲーニヤ・ヤコヴレヴナ！お母様！おお、なんてこった！

母：（レヴィタンを見て、すすり泣き、嘆く）レヴィタシャ、ああ、なんてこった...何て瘦せたんだ！青白い！みすぼらしい！

皆笑う。

レヴィタン：フランス人がまともに食べさせるもんか！食べ物じゃない、まるで誤解だ！君たちの家に滞在して、太ってやるよ！お元気ですか？パーヴェル・エゴロヴィチは？お元気ですか？

母：私たちの健康なんて何になる？今日生きてて、明日は生きてた、で終わりだ！病気にもならないし、健康でもない。

レヴィタン：あなたは、私の優しくて、素敵なおエヴゲーニヤ・ヤコヴレヴナ、若返りましたよ！そして明るい服を着るようになった！

母：（涙ながらに）マーニャと一緒にやっと黒い服を脱いだばかりなのに、やっと！

アントン：今日はみんな涙もろいね。

母：（精力的に鼻を鳴らす）あらら！（台所に飛んでいく）

アントン：ベドウィンがお母さんを感動させたな！何か塩を入れすぎるとは違いない！僕の忌々しい出発を記念して、忌々しいサハリンへ、今日はルックッロフの夕食を出すんだ！本当に、偉大な、しかし、リーカは鶏を盗んで食べてしまった。

リーカ：私はうっかり！でもスープは残ってるわ。

アントン：（リーカに何度かお辞儀をする）スープには大変感謝します。大変！スープには——ザリガニの肝。次に——バニラ入りの乾燥小魚。そしてデザートには——ロジンアイスクリーム。

レヴィタン：俺はイエスが荒野にいた時のように空腹だ！

マーシャ：パリはどうだった？

レヴィタン：（疲れて）パリか？感想は山ほどある！素晴らしいものもたくさん！でも精神病質的なものの方がもっと多い！すべてに極度の退屈がある！俺の健康は最悪で、精神的状態はもっと悪い。外部からの印象は何も与えない。俺の苦しみの始まりは、俺自身の中にある。どこへ行っても、自分自身から逃げているだけだ。それを自覚するのは恐ろしい。

アントン：僕の部屋へ行こう！二階はまだ片付いていないと思う。

マーシャ：まさにその通りだから、私はあなた方をお暇させるわ！

レヴィタン：いいえ、マーシャ、いいえ、私たちを見捨てないで！

マーシャ：用事があるの、でもすぐに戻るわ。（台所へ行く）

アントン、レヴィタン、リーカは書斎へ移動する。

レヴィタン：（非常に感動して）いや、君のマーシャは完璧の極みだ！高等女学校を卒業して、体育館で歴史と地理を教えている。生徒たちは彼女を崇拜しているに違いない。違うか、リーカ？崇拜している？

リーカ：崇拜してるわ。

レヴィタン：ピアノも素晴らしく弾く！違うか、リーカ、素晴らしいだろ？君は音楽家だろ？

リーカ：素晴らしいわ！

レヴィタン：それに絵も素晴らしく描く！（壁の作品を調べる）見える！分かる！これは彼女のだ。これも！新しい作品だ！素晴らしい！違うか、リーカ？

リーカ：私はそれについては全く分からないけど、マーシャは何においても超えられないと確信してるわ。

レヴィタン：これはどこから来たんだ？クフシンニコワのか？

アントン：贈り物だ。

レヴィタン：君に？

アントン：僕に。偉大な作家としてね。

レヴィタン：プレシヨース時代から何の進歩もない。停滞だ。でもマーシャは、マーシャは！それに家もきちんと管理してる！安らぎ、居心地、清潔さ——全ては彼女の小さな手の仕事だ。おお！君がいつもそうやって生きているように、一日だけでも生きられたら、ワニよ！

アントン：そうだ、マルーシャ・パヴロヴナは我が家の囲炉裏の神様だ！

ポーリャ：（ドアの向こうから）アントン・パーヴロヴィチ！

アントン：お入り、ポーリャ！

ポーリャ：（ドアを少し開け、頭を差し入れる）写真が届きました！お金を待ってます。

アントン：レヴィタン、リーカ、お互いに控えめに振る舞ってくれよ！（出て行く）

リーカ：（活気づいて）写真が届いたのね！私たち、復活祭にみんなで一緒に写真を撮ったのよ。ここの中庭で、別棟のそばで。

レヴィタン：ああ、これはマリヤ・パヴロヴナの去年の習作だ！なんて進歩だ！彼女は今年、よく描いているのか？

リーカ：そこそこ描いてるわ。でも最近はアントン・パーヴロヴィチのことで忙しいの。

レヴィタン：素晴らしい、献身的な娘だ！アントンをくそくらえにしろ！学校も！そして俺のところに弟子に來い！六、八年の過酷な努力で、彼女からは才能が出てくるだろう！これは俺、レヴィタンが言うんだ！

アントン：（写真を持って入ってくる）俺がいない間に何を話してたんだ？リーカ、レヴィタンの言うことを信じるな！俺だけを信じる！

リーカ：写真をちょうだい！なんて素敵！写真を撮られるのが大好き！ああ、これ、私、写りが悪くて目が寄ってる！いつも上手く撮れないの！

アントン：（彼女と一緒に見る）偽善者だな、リーカ！

レヴィタン：アントン、君が聞いて辛いだろうが、真実を愛するゆえに隠せない。君、この金髪で徳高い奴が去ったら、俺がリークシャと恋愛を始めるんだ！なぜなら彼女は、俺がこの敷居をまたいだ瞬間に、君を嫌いになり、俺を愛したからだ！

リーカ：百年後、誰かがこの写真を手に取り、私について尋ねるかもしれないと思うと、ぞっとするわ：「この、偉大な作家チャーホフの隣にいる、斜めの目をしたお嬢さんは誰ですか？」って。

アントン：リークシャ、百年後には、誰も俺のことを覚えてないよ！そして写真を見て、君たちを見て、おそらくこう言うだろう：「百年も前のお嬢さんたちは、なんて素敵だったんだろう！」って。

レヴィタン：俺にも見せろ！もちろん、先頭は白いジャケットのワニ、いわゆる天才だ！君が本当に天才だって？それは俺にとってひどく不愉快だ！天才が俺だけであってくれる方が、ずっと嬉しいんだが。

アントン：失礼します、夕食に着替えてきます。

リーカ：失礼します、写真をお年寄りたちとマーシャに見せてきます。（出て行く）

アントンは寝室に消え、ドアは開け放たれたままにする。レヴィタンは書斎を歩き回り、全てを調べる。

レヴィタン：手紙が、手紙が君にたくさん来てるな！でも全ては前と同じで、まるで俺が旅に出なかったかのようだ。今日は土曜日だ。きっと夕食には家が人でいっぱいになるだろう！つまり、やっぱり行くのか？どこも良くないが、外国は故郷より悪い。どこかで誰かから、これは君の偉業だと聞いた。そして君はまっすぐに祖国の歴史に名を刻むだろう！俺は偉業にはあまり向いていない。せいぜい恋愛の偉業くらいだ！君もそれには疎くないな！そうだろう、友よ？どうして偉業じゃないんだ？！君の衝動は美しく、人道的だ。君は健康を、おそらく命さえも危険にさらしている。しかし、そのすべてに、普通の人間的な意味はあるのか？君の旅を偉業と呼べば、意味はもう必要ないようにも思える。何が君を駆り立てる？何から逃げている？すべての編集者が君の掲載を望んでいる。すべての劇場が君の作品を上演したがつている。すべての新聞が君を罵っている。モスクワのすべてのサロンで、君の話ばかりだ。私は汽車で、二人の可愛い貴族の令嬢の母と一緒に旅をした。道中ずっと、私たちは仲良く君を称賛していた。彼女たちは私を画家として知っていたが、私に興味があったのは、ただ君の知り合いという理由だけだった。女たちは、君と二言も交わさずに、骨の髄まで恋に落ちる。君の家族は君を崇拜している。君は、まだどこかへ行く必要があるのか？永遠のユダヤ人のように、安らぎを見つけれないのは、むしろ私の方だ。退屈だ...退屈だ...何か退屈に効く薬を処方してくれ！君はまるでイリヤー・ムーロメツだ。三十年座って力を蓄え、そして突然、都市や村落に飛び出し、正義のために戦おうと決心した！

アントン：（寝室から）少なくとも半年は、今までのように生きるのはやめたいんだ。分かるかい、もし独身だったら、ロシア中を旅していただろう。そしておそらく、全世界、両半球さえも！金だ！金銭的にひどく怯えてる！君は天才だと言う！しかし僕は、受け取れなかった二十ルーブルに依存している！家族と暮らしている。家族を経済的に制限する——何であれ——その方法が分からないし、それが可能だとも思わない。今は安心している、十二月までは家族は保障されている。（素早く出てきて、着替えを終え、地図に近づく）見てごらん！君と一緒に行かなかったことを後悔するだろう！ニジニ・ノヴゴロド。ペルミ。チュメニ。トムスク。イルク

ーツク。スレテンスク。アムール川を下ってニコラエフスクまで。サハリンで二ヶ月。それから上海、マニラ、シンガポール、コロンボ。そこはもうセイロンだ。コンスタンティノーブル。オデッサ。そしてまたモスクワ！羨ましいかい？（咳き込む）

レヴィタン：『樁姫』の最終幕のように咳をしているな！療養しろ！クリミアへ！湿ったサハリンじゃなくて！君は去年、自分に結核の兆候を見つけたんじゃないのか！（地図に近づく）ロシアだ！道路は悪い！無能、無礼、役人の横暴！そして憲兵！なぜ君は「聖徒たちと共に安らかに」なるのを早めたいんだ？「永遠の記憶」は君から逃げたりしないぞ！

アントン：「永遠の記憶」まで、あと四半世紀はある！くだらない！私の親類にはもっと悪い肺の者もいたが、大丈夫だった！自分が医者であることが、かえって厄介だ！

二階からピアノとリーカの歌声が聞こえてくる：「昼が支配しようと…」

レヴィタン：（天井を見上げて）素晴らしい声だ！素晴らしい！（沈黙）分からない…君は、この不幸な人々をどう助けたいんだ？どんな権利で、この地獄の第九圏に行くんだ？

アントン：何の権利もない。しかも自費で。公式の協力を誰からも得られなかった。

レヴィタン：（二階の歌声に合わせて口笛を吹く）最初の役人の面が、君を送り返すだろう！君が有名な作家だとしても…素晴らしく歌う、素晴らしく…ロシアの最良の人々が君の声に耳を傾けていても…しかし、有罪も無罪も粉砕する官僚機構の前で、君は何ができる？そもそも、君に一人でこれらの永遠のロシアの問題を解決する力があるのか？

アントン：問題を解決するだって？それは政府の仕事だ！彼らの責任だ！ロシアの知識人としての自分は、問題を正しく提起し、それへの注意を引きつける義務があると考えている。

レヴィタン：（大げさに引用する）『なぜ君は、うめき声が聞こえる場所へ行かなかったのか？なぜ君は自己犠牲を捧げなかったのか？』君は誰の注意をサハリンに向けたいんだ？誰がそれに関心を持っている？誰が興味を持つ？権力者の誰が、個人的な利益に関係しないことに、少しでも関心を持つというのか？！

アントン：サハリンは耐え難い苦しみ の場所だ！我々は何千人もの人間をそこに流刑にしている。これらの本から分かるように、我々は何百万人も

の人間を刑務所で腐らせた！罰せられずに腐らせた！我々は人々を寒さの中、鎖につないで何万ヴェルストも駆り立てた！我々は彼らに梅毒を感染させた！我々は犯罪者を増やした！我々はますます多くの人間を自殺に追いやっている！そしてこれを全て、刑務所の赤鼻の看守たちのせいにしたのか？今やヨーロッパ全土が知っている、責任は看守たちではなく、我々全員にあるのだと！しかし我々はそれを気にしない！我々は興味がない！我々はヨーロッパの意見を軽蔑し、この話題はもう飽き飽きしている！我々は話し、話して、そして放り出した！我々ロシアの知識人は、いかに容易に人々の苦しみに甘んじていることか！いかに容易に、自分たちの個人的な高潔さに満足していることか！いかに快適さを求め、それを大切にしていることか！我々の誰も、こんな生活を送りながら、平静な良心を持てはるがない！こんなふうに生きることは、新しい犠牲者を流刑に、監獄に、重労働に、絞首台に送ることを望むことに他ならない！

二階の歌声が止む。

男たちも黙り込み、何かを待っているかのようだ。

そして再び二階から：「昼が支配しようと」...

レヴィタン：（無頓着に）ああ、チェーホフ、なぜそんな遠くへ行く必要がある？結局のところ、ロシア全体がサハリン島なんだよ。（長くため息をつく）

アントン：しかし、何かをしなければならない？！何もしないことに、どんな意味がある？私の良心は翼を羽ばたかせているが、どこへ飛んでいいのかわからない。ツイてない。百年後に生まれれば良かった！ロシア人は準備に長い時間がかかるが、走り出すのは速い。今はまだ準備を始めたばかりで、どう終わるかはわからない...

レヴィタン：そして、この素晴らしい時代に生きることは、もう俺にも君にも許されないだろう！（長くため息をつく、しかし機嫌は良い）アベルは正しく、カインは罪深い、しかし二人とも殺された。（歌を聴く）くそっ、なんて素晴らしい！君は幸せ者だ、ワニよ！

第二幕

同日の後半。

玄関には、明るい飾り旗の花綱がある。窓台にはいくつかの花束と花籠。書斎では全てが整理整頓されている。アントンは明らかに書類の整理を終えようとしている。

ベルの音が鳴る。

マーシャが階段を降りてきて、ドアを開ける。ドアの向こうから花の籠と、無骨な庶民的な声が差し出される：「作家チェーホフ様にお渡しするようになされました」。

マーシャ：ありがとう！（籠を受け取り、ドアを閉め、花に添えられた手紙を読む）...敬意を込めて...高貴な目的...献身...未来を見据えて...盲人協会。（笑う）

レヴィタン：（階段を駆け下りる）マリヤ・パヴロヴナ！マシェッタ！ワニは君に何を処方したんだ、君はどんどん美しくなっていく！崇拝者から花か？もし君が俺と結婚しなかったら、みんなを撃ち殺してやる！

マーシャは笑う。

レヴィタン：（さっきアントンがリーカの前で冗談でひざまずいたのと同じ場所で、マーシャの前にひざまずき、彼女の靴にキスする）マリヤ・パヴロヴナ！マーパ！君の顔の一点一点が大事だ！君なしでは生きていけない！お願いだ！お願いだ——イエスカノーか？今すぐに！

マーシャ：（戸惑って）今すぐって？私には分からない——プロポーズしてるの？

レヴィタン：くそっ、そうだ、早くしろ！はっきり言ってるだろ！

マーシャ：でも...

レヴィタン：そんな「でも」はくそくらえだ！

マーシャ：でもアントンが...

レヴィタン：アントンはくそくらえだ！

マーシャ：でもサハリンが...

レヴィタン：サハリンもくそくらえだ！くそくらえ！くそくらえ！イエスカノーか？！

ベルが鳴る。

マーシャ：すみません、今は何も考えられないわ。ベルよ！

レヴィタン：ベルなんてくそくらえだ！

マーシャ：誰か来るわ！立って！

ベル。

マーシャ：後で、後で話しましょう！

レヴィタンは手を振って立ち上がる。マーシャがドアを開ける。レヴィタンは口笛を吹きながら、誰が来たかも気にせず二階へ上がっていく。婦人が入ってくる。三十代半ばは過ぎている。高価な服装だが、間違った主張がある。

婦人：遅れなかったかしら？チェーホフ氏はまだ面会してくれる？

マーシャ：残念ながら、いいえ。彼は数時間後に出発します。

婦人：待ちますわ。いつお戻りに？

マーシャ：十二月より早くはないでしょう。

婦人：でも、今は四月ですわ！

マーシャ：その通りです。

婦人：では、なぜ「医師チェーホフ、午後一時から三時まで診察」という札を外さないのですか？

マーシャ：ご病気ですか？

婦人：私は憤慨しています。ねえ、チェーホフ氏が私のために時間を割いてくれるかどうか、聞いてみてくれませんか？

マーシャはどうすべきか迷う。

婦人は突然、マーシャの手のひらに紙幣を押し込む。

婦人：これはお茶代よ、ねえ！伝えてちょうだい！ナジェージダ・ミハイロヴナ・ストウピナ、家主です。

マーシャ：（皮肉を込めて）家主？それなら、おそらくチェーホフ氏はあなたにお会いするでしょう。伺ってみます。お待ちください。（アントンのところへ行き、ドアを閉める）あなたに診察を求めて来た病人の家主よ。ひどく健康そうに見えるけど。診てあげて！もうお茶代をくれたわ！

アントン：（両手を広げて）診なければならぬね。招いてくれ！十分ほしたら、何か急用で来てくれ。

一緒に廊下に出る。

アントン：（婦人に）ご機嫌よう！

婦人：（興奮して）こんにちは、敬愛なるアントン・パーヴロヴィチ！

マーシャは台所へ行く。

婦人：（マーシャの後ろ姿に）あなたのところの使用人は、なんて無礼なのかしら。

アントン：ええ、甘やかしてしまって。私の書斎へどうぞ。

婦人：とても申し訳ないのですが、私は...馬車を帰さなければなりません。小銭がなくて。両替していただけますか？（彼に紙幣を差し出す）

アントン：なぜ帰す必要が？馬車を待たせておけばいいじゃないですか！

婦人：長居しそうなので。

アントン：申し訳ありませんが、お詫びしなければなりません...ご覧の通り、今日出発するものですから...

婦人：あなたの使用人が私に伝えました。必要な時間以上はお取りしませんわ。

アントン：両替はおそらくできませんが、小銭が少しあります...（ポケットから小銭を取り出す）

婦人：（泣きそうな声で）ああ、なんて失礼な...トライウムファルナヤ門のところで馬車を捕まえたんです...どうか、適当な金額をお支払いださ...ああ、なんて私は不器用なんでしょう、恥ずかしさで...

アントン：ご心配なく、何も問題ありません、すべて片付けます。（外に出る）

マーシャ：（台所から出てくる）どうしてここに？どうぞお外套をお脱ぎになって、書斎へお通りください。アントン・パーヴロヴィチはどこに？

婦人：（無造作に）私の馬車の勘定をしているのよ、ねえ。

アントンが戻る。

マーシャ：アントン！上着も着ずに外へ！正気？

アントン：君の言う通りだ。すべきじゃなかった。湿ってる。（婦人に）どうぞ、お入りください！

アントンと婦人は書斎へ行く。マーシャは二階へ。

アントン：散らかっていてすみません。お掛けください。どこがお悪いのですか？

婦人：（気まずそうに）胸の圧迫感。咳。何かがこびりついて圧迫するように、いつも寝る前に。

アントン：ご結婚なさってますか？

婦人：未亡人です。

アントン：どうぞお脱ぎください！

婦人：何とおっしゃいました？

アントン：お脱ぎください！聴診しますから。（背を向ける）上半身まで。

婦人：（肌着一枚になる）あなたは私がどんな気持ちか、お分かりにならないでしょうね。

アントン：胸の圧迫感——分かりました。

婦人：あなたにどれだけ感謝しているか、お分かりになりません！

アントン：今のところは、何も。

婦人：あなたは私を育ててくださったのです。

アントン：そうお思いですか？

婦人：あなたの本です。そして、それらが批判されると、私は相手の目をえぐりたくなります！

アントン：それは過激です！人にはそれぞれ意見があります。

婦人：その意見のために、自分の手で吊るしてやります！でも、あまりに気まずいです、あなたはお忙しいのに...

アントン：私は医師であり、患者を診るのは私の義務です。

婦人：私は折が悪くて、あなたは私をしつこいと思うかもしれません。

アントン：ところで、作家の肖像画が包み紙に描かれたキャラメルが売られているのを見たことはありますか？

婦人：何？何ですって？いいえ！

アントン：（診察し、聴診し、打診する）息を止めて。トルストイ、ドストエフスキー、コロレンコがその栄誉に浴したのに、私はまだなんです。心外だ。息をして。

婦人：（息を吐く）ロシアにとっては心外です！それとも...冗談？

アントン：全く！痛くないですか？

婦人：いいえ。

アントン：確かに、自分を鏡で見たことはありませんね。では、ここは？

婦人：いいえ。

アントン：もしかしたら、あなたはご覧になったかと。

婦人：今は、息を吸うんですか？それとも吐くんですか？

アントン：お好きなように。お着替えください。はっきりしました。致命的なものは何もありません。軽い神経症です。胃の不調は？

婦人：何をおっしゃる？そんなこと、どうして？

アントン：結構です！お薬を処方しますね。（処方箋を書く）一週間、就寝前に十六滴お飲みください。

婦人：夕食の前？それとも後？

アントン：後で！そして夏は田舎へ行って、健康的な空気を吸ってください。散歩して、恋愛にふけて、いつの間にか、すべて治っていますから。

婦人：（着替え終えて）本当に感謝しています、感謝しています...もう楽になりました。あなたは私に...

アントン：あなたはとても軽いケースです。お礼には及びません。（診察が終わったことを明確に示す）

沈黙。

婦人：どんなに多くの、しつこくて無作法な女性訪問者があなたを悩ませ、文学から時間を奪っているか、想像できます...信じてください、私はその一人ではありません。

アントン：とんでもない！お会いできて非常に嬉しいです！

婦人：お忙しいにもかかわらず、私を診て助けてくださった。何でお返しすれば？どう感謝すれば？

アントン：これは私の仕事です。

沈黙。

アントン：お大事に！もっとお話ししたいのは山々ですが、時間がありません。今日出発しますので。

婦人：（座る）何時に？

アントン：八時頃に。でも、ご存知のように、出発前はいつもやることがたくさんあります。

婦人：いつお戻りに？

アントン：十二月の予定です。

婦人：どちらへ？

アントン：小旅行です。セイロンと、その他いくつか。

婦人：芸術の祭司であるあなたは、なんて輝かしい人生、なんて祝祭的な人生を送っているのでしょうか！地上の心配事は何もない！お見送りさせてください！お断りしないで、お願いします！

アントン：私の見送りには多くの方が来ます、親戚や友人が。

婦人：遠くからです。近づきませんから。

アントン：おやめいただくようお願いします。

婦人：（苦しげな仕草でこめかみを揉む）すべて終わりました！あなたは私をとんでもない人とお思いに。

アントン：あなたは間違っています。

婦人：どうせ、今私が去れば、あなたはすぐに私のことを忘れるでしょう。あるいは、知り合いにちらりと言うでしょう：「つまらないお婆さんが来て、恋愛宣言をした」と。

アントン：私の患者について、そのようなことを誰かに言う理由はありません。そもそも、私は分別のある人間です。（笑う）

婦人：それなら、私にとってはなお悪い！お見送りさせてください！私には権利があります！

アントン：（きっぱりと）どうかご心配なさないでください。

婦人：おびえさせましたか？（息を切らし、やや大げさに）こんなに居心地がよくて、平穏で、人生から遠く離れた、高い塔の中に...そして突然、すべてをなぎ倒す嵐！チェーホフは作家としては、残念ながら、男性としてのチェーホフよりも洞察力があり、賢明です...私はあなたの最高の作品『遅咲きの花』をほのめかしているのです。ああ、あなたはあの作品で、マルーシャのトポルコフ医師への気持ちをいかに正確に描かれました！それなのに、なぜ現実の人生では、まさにその同じ気持ちを見抜けないのですか？それとも、それがあなたを怖がらせるのですか？（泣き出す）

アントン：（デキャンタからグラスに水を注ぎ、差し出す）どうかお静まりください。

婦人：（水を飲む）あなたにはきっと、よく...でも、それは私には関係ない...これで言いたいことは言いました...あなたにそうさせたのです...もっと水をください！

アントンはもう一杯注ぎ、差し出す。

婦人：私じゃない！あなたが！水を飲んで！あなたは動揺してる！（感情的に攻撃的に彼に迫る）あなたは水晶の城に住んでいる！花やバラに囲まれて！感情から遠く離れて！そして私は感情を持ってあなたのところに押し入る！そしてあなたは怖がっている！そして何をすべきか分からない！

マーシャ：（ノックもせずに入ってくる）アントン、もうすぐ終わる？至急用があるの！

婦人：あと一分！

アントン：すみませんが、私は非常に忙しいのです。

婦人：たった一分だけ！私はこの一分のために命を捧げる覚悟です！

アントン：お聞きしましょう。マーシャ、ここで待っていてくれ！

沈黙。

婦人：手紙をください、お願いします、セイロンから手紙をください！書いてください——あなたに言いたいことがたくさんあります。ポリャンカ通り。自分の家。ナジェージダ・ミハイロヴナ・ストゥピナ。あなたが今日出発されることを知らなかったのが残念です！

マーシャ：ポーリャ！

ポーリヤが入ってくる。

アントン：（婦人に）ご無事で！

婦人：良い旅を！私はニコライ聖人にあなたのことを祈ります！

アントン：ありがとう。

マーシャ：（ポーリヤに）患者さんをお送りして！

婦人は出て行く。以降はポーリヤが対応する。

マーシャは書斎のドアをしっかりと閉め、しゃがみ込んで笑う。

アントン：君が一分遅れて来たら、彼女は僕にプロポーズしてたところだ！彼女は僕を、嫁入り前の作家として扱ったんだ。

マーシャ：私にはさっき、嫁入り前の娘として扱われたわ。

アントン：想像もつかないな。誰だい？それが乙女の心の秘密でないなら。

マーシャ：秘密だけど、あなたには話すわ。レヴィタンよ。

アントン：本気なのか、マーシャ？

マーシャ：彼は本気よ。最高のヴォードヴィルのように——ばったりひざまずいて、アフリカ的な熱狂的な情熱と誠実なプロポーズ。

アントン：で、君は？

マーシャ：何も！そしてまた、ヴォードヴィルのように——説明の最中にベルが鳴って、あんたのあの患者が現れたの。私たちは説明を邪魔されたのよ！

アントン：君の自由だ、マーシャ！君にはレヴィタンに対処するだけの性格がある。でも、僕の理解では、家庭生活は平穏であって、情熱や闘争ではない。

マーシャ：私もそう思う。

アントン：つまり？

マーシャ：お断り！

アントン：君は、僕の知っている娘たちの中で一番我慢強い！敬服するよ！マシェッタ、最後の用事だ。アーカイブは整理した。余計なものは暖炉に捨てた。君には、引っ越しの際に何も紛失しないように、しっかり見張

ってほしい。この『夕暮れに』『陰鬱な人々』『子供たち』の選集をタガンログ図書館に送ってくれ。それと、トルストイのサイン入りの『闇の力』もそこへ。自分の蔵書は故郷のタガンログに遺贈することにしたんだ。整理していると、たくさんの本が盗まれているのに気づいた。マーシャ、悲壮な顔をするなよ！僕はあと百年は生きるつもりだ！しかし、この間に僕の善良な知人たちが蔵書を全部持ち去ってしまうのが怖い！そしてタガンログには何も残らない！そこで、ここに書いておく——僕の全財産と今後の著作からの収入は全て君に！僕の借金を返し、母の面倒を見てくれ。

マーシャ：そんな考えはやめて！出発を延期しよう！あなたは多大な労力を費やして疲れている。私が怖い。今、あなたは旅に出るべきじゃない！

アントン：僕には、ほんの一片の社会的、政治的な生活が必要なんだ！ほんの小さな一片——それが唯一の薬なんだ！

マーシャ：私はあなたが無事に戻ってくると信じてる！信じてる！そして最高の本を書く！サハリンについての本を！そして誰も、あなたを無原則で、非思想で、無思考だとは呼べなくなる！誰もがあなたが真の作家であることを認めるだろう！

アントン：正直なところ、私は成功や不成功に関心になってしまった。混乱に疲れた！退屈しのぎに治療を受け、退屈しのぎに恋をする婦人たち！診察代を一銭も払わず、馬車代まで使わせる！毎日、客や女性客が来る！私の時間は尊重されない。何でも長い長くて疲れる会話。ささいな頼み事。金を借りて返さない！本を持ち去る！もし芸術家や作家が社会の最良の部分だとしたら、それは社会にとって非常に悲しいことだ！そして、その最良の部分に、これほどまでに自発性や市民的感覚が欠けているとしたら、それは何という社会だろう！人生が何か無意味に思える！そして時々、全てを憎み始める！

マーシャ：どうすればいいの、アントーシャ？偉大な芸術家の道はいつだって茨の道だ！

アントン：君まで陳腐なことを言わないでくれ！（沈黙）すまない！兄の死後、何故か全ての人や物事に対する苛立ちと罪悪感があるんだ。

マーシャ：（しばらくして）あなたは休めるわ、アントーシャ！サハリンの後には、セイロン、シンガポール、日本が見られる...今世紀の生きたおとぎ話！そして金銭的にも楽になる。ミーシュカも独立するだろう。正しい。このアパートを諦める決断をしたのは正しかった！年間六百五十ルーブルは私たちには重すぎる！私は個人授業を引き受けるわ...

アントン：君は絵を学ぶべきだ、マーシャ！さもなければ、君の時間は過ぎてしまう！もし少しでも才能があるなら、それを潰すのは不道德だ。

マーシャ：自分が画家にならなかったことを、決して後悔しないわ！私の人生には別の意味があり、別の目的がある。

アントン：君の気持ちには、僕と同じように、多くの常識がある。そして私たちはそれに従わないように自分を強制できない。それは良くないことだ、マーシャ！それは魂の停滞を招く。個人的な生活が必要だ、マーシャ！結婚しろ！私のかけがえのない妹よ、僕の寛大さが分かるかい？それか、リラックスして、十二日ほどクリミアへ行け！恋愛をして、思い切り生きろ！悪魔がうんざりするほどに！

マーシャ：アドバイスありがとう！すぐに結婚して、毎年子供を産むわ！

アントン：マリヤ、君はスフィンクスのように謎めいてる。僕の知る限り、君は世界で唯一、心から結婚したがない娘だ。僕の観察によると、君は少なくとも十二の心を打ち砕いただろう。

マーシャ：想像してみて、もっとたくさんよ！

通りからミーシャの声が聞こえる：「勝利の鐘よ、響き渡れ！喜べ、勇ましきロスよ！！！」

アントンとマーシャは我先にとドアを開けに飛んでいく。

ミーシャ：（ほろ酔いで入ってくる）アントン！マリヤ！君たちは、自分の同母兄弟のミハイルを、人生で最後に見ている！学生服を着て。そして神よ、どうか今後、すべての制服、階級、勲章、称号から、立派な人物と正直な作家という称号以外は、私を救いたまえ！アーメン！

マーシャ：（抱きしめる）ミーシュカの豚野郎、もう一杯やったの？

ミーシャ：マリヤ、君を尊敬しているが、黙ってろ！君は何も分かってない！僕は兄と話してるんだ。彼は学生だ。そして僕も学生だ。二人とも大学人だ。僕は誇りに思う。（アントンを抱きしめ、彼にぶら下がる）

アントン：（彼を書斎へ引きずり込み、ぶつぶつ言う）誇ることを見つけたな。ロシアの学生は大嫌いだ！怠け者どもだ！（ミーシャをソファに寝かせる）大学では勉強以外の何でもやってる！

ミーシャ：（足を上げる）その通り！万歳！！

アントン：講義にはまともに出席せず、ノートも取らず、たまにしか勉強しない...

マーシャ：主に試験の前だけね！そして、ようやく大学の全課程を終えても...

ミーシャ：それを、ぎしぎし鳴る荷車のように、轍やでこぼこ道を走り抜けて...

アントン：ロシアの学生からは、知識人や、教育された、専門家は育たない。

ミーシャ：（髪を引き裂き、壁に頭を打ちつけるふりをする）恥ずかしい！学生になった日を呪う！

アントン：（厳しく）大半は、四年間の怠惰によって墮落し、真剣な仕事には不向きな人間が大学を出る。しかし、尊大で、知らないこと、理解していないことについて判断する公式の権利を持つ。しかし君は違う、フィーニク！君は知識への渴望に対して、外国語の習得に対して、文筆に対して、あらゆる尊敬に値する！

マーシャが飛び出していく。

アントン：マーシャ、どこへ？

マーシャ：すぐ戻るわ！

アントン：そして、私は君の兄として、神と人々の前で君に責任がある者として、君に命じる！月桂冠に安住するな！学生の怠惰を忘れろ！そして君の日々を過酷な労働で満たせ！

マーシャがシャンパンの瓶とグラスを持って戻ってくる。

マーシャ：それに乾杯しましょう！

アントンが瓶を開ける。

ミーシャ：（キスをしながら邪魔をする）アントン！雄弁なる我が兄よ！

アントンがシャンパンを注ぐ。

ミーシャ：（グラスを掲げて）大学で学び、卒業させてくれてありがとう！感謝して、深々とお辞儀をします。

全員が飲む。ミーシャは素早くもう一度注ぐ。

ミーシャ：飲ませて食わせてくれる者は良いが、パンと塩を覚えている者も悪くない！

飲む。

アントン：そして私も君に感謝する。

ミーシャ：何のために、兄者？

アントン：君の私への助力に！君の長年にわたる伝令役と秘書役に。あの、当時は微々たる原稿料だったのに、編集部へ君がしてくれた屈辱的な足運びに！

ミーシャ：（大笑いしてアントンに抱きつく）おお、覚えているのか、兄者！特に『今日のニュース』が私を苛めたな。

アントン：（大笑い）今日の嫌がらせ！

ミーシャ：編集部は一部屋に全部あった。隅に追い込まれて、何時間も待つんだ。その間、購読の受付をしていて、従業員が叫び、訪問者が押し合う。なぜか部屋の真ん中にはピアノ！その前で編集者の親戚が音階を練習してる！タタタ...

マーシャ：（悲鳴を上げて笑う）ミーシュカの嘘つき！

ミーシャ：（動じず）その隣で教師が力いっぱい足で拍子を取り、みんなの声をかき消そうとしている。（教師の真似をして）いち、に、さん...といち、だ！（涙声で）そんな風に、座ってるんだ...座ってる...自分は泣いて、家が恋しい。編集者が出てくる：「何を待ってるんだ？」「三ルースブルを受け取りに来たんです」。（編集者の真似をして）「だが、私にはない！三ルースブルがない！さあ、劇場の無料券を持っていけ！」（涙声で）「三ルースブルがほしいんです！」（編集者に代わって）「なんてわからず屋だ！三ルースブルの代わりに、新しいズボンを持っていくか？」（苦悶の葛藤を演じて）「ズボンをいただきます。」「じゃあ、アーロントリーヘル仕立て屋に行って、私の勘定でズボンを受け取ってこい！」

マーシャ：でも、やっぱり嘘ばかりね、ミーシュカ、全部嘘！

アントン：（弟を抱きしめる）可哀想なフィーニク！もし僕自身が自分の原稿料を受け取りに行っていたら、書くのをやめてたろう！もう一杯やろう！酔っぱらって、汽車に乗れなくなるまで！

ミーシャ：今度はマルーシャ・パヴロヴナがスピーチをしてくれ！

マーシャ：何を言えばいいのかしら？（ため息をつく）私はあなたが、寒いコートを着た小さな体操科生だった頃を覚えていて、愛しているわ。ラズグリヤイの体操科まで三ヴェルストも歩いて行ったのね。歩きながら泣きじゃくってた！あなたはか弱くて、半ば飢えていて、体操科でいじめられてたわ。そして家を出るとき、お母さんにハンカチを二枚頼んだの。一枚は涙用——あなたはそう呼んでたわ「泣きハンカチ」。お父さんの倉庫に「店員」として入るように勧められたわ。そっちの方が食べ物も豊富で暖かくて、お父さんの保護もあった。でもあなたはどうしても学びたかった！

ミーシャ：兄を見習ったんだ。アントーシャがタガンログで苦勞し、飢えていたのは、体育館を卒業するためだって分かった。家の家具を売り払って、その金を全部モスクワの家族に送ってくれたんだ。私たちはどれほど彼からのお金を待っていたか！それに彼は私たちに、こんなに楽しい手紙を書いてくれた！私たちはみんなで、そして一人でも読んで、大笑いした！そして僕はお父さんの倉庫に走って、一番先にアントーシャの手紙を読ませてもらったものだ。

マーシャ：そして、あなたは、私たち家族の末っ子が、立派になったわ！お父さんとお母さんは、あなたが官職に就き、良い地位に就くのを夢見ている。あなたのために！

飲む。

アントン：（考え込んで歩き回る）奉公は逃げないさ。ミーシュカ、勇気を出して、真剣に文学に取り組み。君が今書いているものは、初心者としては悪くない。

マーシャ：でも彼は『児童読物』にしか載せてもらえないの！真面目な雑誌は断るのよ。

アントン：窓辺に載せてもいい、読まれさえして金を払ってもらえれば！僕はどうやって始めたと思ってる？『目覚まし時計』『トンボ』『風刺新聞』を通して、分厚い雑誌と立派な人々の心へと進んだんだ。

マーシャ：ミハイルはあなたとは違う。自由な芸術家になるには、性格が弱すぎる！私はあなたが彼をそういう風に導くのは間違いだと思うわ。私たちの経済状況は逼迫している。ミーシュカは副業で公証人くらいできたはずよ。

マーシャ：心が二つに割れては、祈りもままならない。

アントン：何が悪いのか分からない——心が三つに割れていてもいいじゃないか！僕自身、三つの神——医学、文学、演劇に祈ってるんだ！

マーシャ：あなたと彼を比べられない！あなたは彼の年で、もう家族を養っていたわ！

アントン：誇張しないでくれ！誰も手をこまねいて座っていたわけじゃない！みんな働いてた！そして、ついでに言うと、僕は文筆収入で家族を助けていた！ミーシュカには文学の才能がある。

マーシャ：ニコライはとても才能があったわ！無計画で無責任な生活が彼をダメにした！彼は本当に重要なものは何も生み出せなかった。最高の作品さえも完成させられなかった！

ミーシャ：マーニャ、亡き兄貴、ニコラーシャのことをそんな風に言わないでくれ...

マーシャ：わかった！生きている人のことだけ話すわ！私たちの長兄、アレクサンドルは、私たちがどれほど誇りに思っていたか！二つの学部を大学で卒業したわ。優秀な言語学者で、素晴らしいジャーナリストで、自然科学にも才能があった。修士号を取得し、次に博士号を取得し、モスクワ大学の教授になりたがっていた！でも、どうなった？二度の早まった結婚！子供を産みまくった！家は汚く、ゴキブリがいて、金欠で喧嘩ばかり！自由な芸術家！あなたたちの兄イヴァンと、私、あなたの妹も、才能がないわけじゃない！私たちは教師よ。官職に就いて働いている。誠実に義務を果たし、社会に役立つ貢献をしているわ。私たちは経済的に自立している。両親を敬い、できる限り老後の世話をしている。父はイヴァンのところで、まるでキリストの懷にるように暮らしている。母は私たちのところで何の不自由もなく暮らしている！私たちの祖父は農奴だった。父は店主だった。アントンはロシア全土に名を知られた作家になった！彼の机は祭壇だ。そしてその祭壇に、彼は青春を捧げた！そして毎日、その祭壇に健康を捧げている！そして私生活も！君自身、ミーシャ、すべてに耐えられるかどうか、確かめてみなさい！

ミーシャ：私は普通の家族に属している。大学人だ。働くべきだ。どんな奉公でも役に立てる。それに、もう君の世話になってるのも飽きた、アントン！何かで生計を立てなければ！妹や母を助けなければ！

アントン：私たちはお金を重視しすぎる！それは育った環境のせいだ。そうじゃない！

時計が四時を打つ。

マーシャ：おや！もうすぐ客が来るわ！（瓶とグラスを回収し、台所へ運ぶ）

アントン：決断は僕が戻ってからにしよう。君は大学を終えたばかりだ。休め！周りを見渡せ！夏はダーチャへ行け！彼女たちは男性なしではられない。それから考えよう。

ミーシャ：奉公を断れないよ。家族の中ですごいことになりかねない、神よお許しを！でも約束する、アントニウス、書くことはやめない！

アントン：何とかしよう！

ベルが鳴る。ポーリャが開ける。

台所からマーシャが出てくる。

書斎からアントンとミーシャが出てくる。

クフシンニコフ夫妻が入ってくる。

ソーフィヤ：（アントンに、鋭く）止まれ！動くな！

アントンは道化のようなポーズで固まる。

ソーフィヤ：（彼の周りを回る）あなたをどう描くべきか分かったわ。あなたの顔には、知性と高貴さのすべてにもかかわらず、なんというか、素朴な田舎者のような皺がある。目には田舎者の狡猾さがあるわ。そうだろう、クフシンニコフ？

クフシンニコフ：（全員と握手する）そうだよ、我が魂よ！

ソーフィヤ：（アントンに）あなたの正直な手を握らせてください！（両手でアントンの手を力強く振る）

アントンは同じポーズのまま。全員が笑う。

二階から、活気づいたリーカと、倦怠感のあるレヴィタンが降りてくる。

リーカ：（まだ二階から）ソーフィヤ・ペトロヴナ、ご機嫌よう！

ミーシャ：レヴィタン！ミジノワ！今日はなんて人が揃ってるんだ！マーニャもアントンも黙ってる！（リーカを抱き上げてくるくる回す）リーカのベルが鳴るや否や、老いも若きも、そのか細いベルを聞いて、皆、四方八方から彼女のもとへ駆け寄る！

リーカ：大学を卒業したの、学生さん？（頬にキスする）おめでとう！

レヴィタン：さて、ロシアは新しい検事を祝福できるな！俺は『ウラジーミル街道』の複製を贈るよ。

ミーシャ：その手の冗談は好きじゃない！検事にも裁判官にもなりたくない！死刑を含む罰則を要求するのは、私の道徳的原則に反する！

マーシャ：ミーシャは、私たち家族で一番弁が立つから、弁護士になるのよ！

ソーフィヤは、注目されないまま、自分でブーツを脱ぎ、自分自身に「メルシー」と言う。アントンが気づいて、彼女の靴を脱がせるのを手伝う。

ソーフィヤ：（アントンに）メルシー！

ポーリャがソーフィヤの肩掛けを脱がせる。

アントン：（ソーフィヤに）あなたのモデス・ロベスにふさわしい賛辞が見つかりません！

ソーフィヤ：（くるくる回り、チュニクを皆に見せる）みなさん、ご注目を！

あちこちから興奮した、聞き取れない喝采。

ソーフィヤ：生地は自分で染めたの。色はチューリップ、オレンジ、夕日、そして犯罪的な情熱の混ざり合い！（突然、リーカの頬にキスする）必ず！必ず彼女をモデルに白鳥姫を描くわ！そうだろう、クフシンニコフ？

クフシンニコフ：そうだよ、我が魂よ！

エヴゲーニヤ・ヤコヴレヴナが降りてくる。

ソーフィヤ：（彼女に両手を差し伸べて）こんにちは、最も善良で、最ももてなしの良いエヴゲーニヤ・ヤコヴレヴナ！

母：ようこそ！

ソーフィヤ：クフシンニコフ、忘れたの？

クフシンニコフ：そうだ、我が魂よ！いや、違う、我が魂よ！

ソーフィヤ：アントン・パーヴロヴィチ、私たちはあなたにサプライズを用意しました！

クフシンニコフ：失礼します！（アントンの肩に、革製のケースに入った瓶をベルトで掛ける）

ソーフィヤ：そして厳命！このコニャックは、大いなる大洋の岸辺でのみ飲むこと！

皆、笑い、拍手する。

ミーシャ：アントニウスにはコニャックとセイロン、僕にはからっきし！

アントン：（クフシンニコフ夫妻に）ありがとう！

マーシャ：リーカ、見て、なんて素敵なケース！

ソーフィヤ：私はこのケースを作るのに一晩中苦労したの！すべてのサロンで、あなたの旅が一番の話題よ！頑固な噂があるの、囚人たちはただの口実で、本当は政治犯のために行くのだって。

アントン：それは間違いです！中央刑務局長官は私にサハリン全土の視察を許可してくれました。ただし、政治犯とは会わないという条件で。私はそれを受け入れました。

ソーフィヤ：囚人たちに何が面白いの？私は毎日見てるわ！クジンキに来て遊びなよ、今言うなら『悪魔のクーリチキ』ってね。あんなエキゾチックな連中が見られるわ。レヴィタンは遠くへ行かなくても、あの天才的な『ウラジーミル街道』を描けたじゃない？あれが彼をロシア第一の風景画家にしたのよ！そうだろう、クフシンニコフ？

クフシンニコフ：私は風景画は分からないが、我が魂よ！しかし囚人たちは哀れな状態にまで落とされている。彼らの弁護の声を上げるのは神聖なことだ！アントン・パーヴロヴィチは、医師としても作家としても、高貴な目的を自らに課した。

ソーフィヤ：クフシンニコフ、あなたは正しい！あなたとアントン・パーヴロヴィチは、誠実で真面目な人たちだ！

レヴィタン：俺は本当にアントンと一緒に went たかったんだが、人間の喧嘩や悪意による忌々しい神経痛が...来年の春まで延ばせ！一緒に行こう！

父：（上から）そしたら、あの普通の市民みたいになるぞ。毎朝、靴を履く前に、うなり声をあげ、嘆き、腰をかく。

ベルが鳴る。ポーリヤが開ける。控えめに、横っちょからイヴァネンコが入ってくる。人混みに気後れする。

イヴァネンコ：おや、もう全員いるじゃないか！

アントン：イヴァネンコが来た！（クフシンニコフ夫妻に）知り合いでは？イヴァネンコ！我が家全員の忠実な友！（イヴァネンコに）クフシンニコフ夫妻です。ソーフィヤ・ペトロヴナ。画家です。レヴィタンの弟子。震え上がれ、イヴァネンコ！彼女の絵はトレチャコフが何度も買い上げています。ドミートリー・パヴロヴィチ、その夫です。私の同僚の医師です。

ベルが鳴る。ポーリヤが開ける。クンダソワが勢いよく入ってくる。

クンダソワ：愛しのチェヒアにご挨拶！

アントン：（クンダソワに、クフシンニコフの真似をして）止まれ！動くな！（クンダソワの周りを回る——皆笑う）急いで彼女をモデルに若い修道士を描け！

ミーシャ：天文嬢、お相手させてください！（クンダソワの着替えを手伝う）

クフシンニコフ：（ミーシャに）おい、英語文法！まだ大学から追い出されてないのか？

ミーシャ：間に合わなかった。今日、最後の試験を終えた。

クフシンニコフ：どもらなかったか？

ミーシャ：（ふざけて、奇行しながら、早口で）ロシアの君主制は、いわば何か独自のものであり、おそらくその個性においてのみ研究されうる。それを他の既存の君主制と混同することは、それを誤って理解することである。ロシアにおける最高権力の無制限性は証明する...

アントン：これで僕の法学教育も終わりだ！フィーニクはいつも刑法や訴訟手続きや監獄学の講義をばらまいてた。僕は暇つぶしにそれを読んでたんだ。

ミーシャ：認めろよ、サハリン計画は僕の講義から盗んだんだろ！

クンダソワ：私はもちろん、アントン・パーヴロヴィチの自己犠牲に敬服するし、その他もろもろ...でも、結局のところ、無駄に行くんだよ！あなたの旅は、我々の哀れなロシアでは何も変えやしない！

父：窓の中にだけ光があるわけじゃない！家から出れば、もっと見えるものだ！

クダソフ：サハリンはそんなに恐ろしい場所なのよ、皆さん！こんな言葉があるそうよ——「周りは海、真ん中は悲しみ」。私はアントン・パーヴロヴィチのために書き写しをして、今ではサハリンのことは何でも知ってるわ。そこで勤務する軍人には莫大な給料が払われ、一年が二年として計算される。でも皆、そこから逃げ出したがってる！それに、我々の政府は約束は好きだが、約束を果たすのは好きじゃないってのは周知の事実！じゃあどうする？サハリンを日本か中国に譲渡する？そこに流刑にする、それが間違いなく唯一の解決策だ！ええ、ええ、皆さん、私は強制的な植民地化を正当化するのよ！

アントン：たとえ最も重い犯罪を犯した人間の命であっても、何かの手段として扱われるべきではない。

イヴァネンコ：私の理解では、アントン・パーヴロヴィチ、あなたは、いわばキリスト教の根幹的な考え方——あらゆる人間の魂...あらゆる人間の存在は、独立した、不変の、絶対的な価値を表す——に近いのでしょうか？

クダソフ：問題はサハリンじゃないのよ、皆さん！ロシアにおけるあらゆる闘争は運命づけられてる！人生は矮小化している。知性は狭まっている。エネルギーは落ち着きがない。個性は消え去っている。（熱狂し、激しく身振りを交えて）

ミーシャが彼女の後ろで、彼女に気付かれずに彼女の真似をする。

クダソフ：人類全体の利益は形式的なものだ！重要なのは、小市民的な福祉の利益だ！この道を進めば、我々は中国を繰り返すだろう！もしかしたら、何らかの危機が中国のマラスムスを救うかもしれない！しかし、それはどこから来るのか？周りを見ろ！何が国民を奮い立たせられる？そんな考えはあるのか？まだ生まれ得るのか？我々は不完全な小市民性から完全な小市民性へと向かっている！

皆笑う。

クダソフ：何か可笑しいことを言った？

レヴィタン：我々のロシアの生活には、実際、多くの不健全なものがある。しかし、下品さや小市民性は我々には無縁だ！ロシアは非文化的な国だが、私はそれが愛しい、この忌々しい国を！

父：アントーシャ、郵便はあったか？

アントン：ああ、『ニュース』『為替新聞』『医師』だ。僕のところから持っていけ。

父はアントンの書斎へ行く。

アントン：さあ、客間へ行こう、皆さん！

全員が階段を上がる。父は新聞を持って書斎から出てきて、彼らの後について二階へ上がり、途中で新聞をめくる。レヴィタンは立ち止まり、花に添えられたメモを調べる。クフシンニコワが戻ってきて、レヴィタンのそばで立ち止まる。

レヴィタンは気づき、二人きりを避けようとするが、クフシンニコワが階段への道をふさぐ。彼らは互いに見つめ合い、沈黙する。

クフシンニコワ：チェーホフ家の階段は、貴族の集会所のようね。

レヴィタン：やめてくれ、ソーフィヤ、少なくともここでは、場面を作らないでくれ...

クフシンニコワ：手すりは何で覆ってあるのかしら？

レヴィタン：マンチェスターだ。お願いだ、ここでは場面を作らないでくれ！

クフシンニコワ：あなたは完全に私を避けているわね。プレシヨースの後、あなたは私に説明する機会を与えてくれなかった。

レヴィタン：疲れたんだ。

ソーフィヤ：リーカがお好きなの？

レヴィタン：違う。

ソーフィヤ：マーシャは？

レヴィタン：違う。

ソーフィヤ：誰？

レヴィタン：自殺するよ。

食堂

薄い黄色の壁紙の小さな部屋。中央に長い食卓。周りに質素なウィーン風の椅子。テーブルの上には、ブロック式のランプが白いガラスの傘をかぶ

せてある。白いタイル張りの暖炉。ドアには桜色のカーテン。壁には盆や装飾皿。窓台にはアザレアやフィカス。壁のプランターにはサボテン。大きな水槽。明るく楽しい色調が支配的。

全員が既に座っている。クフシンニコワとレヴィタンはゆっくり階段を上がる。

父：（新聞を読み終え、心の中で）無体だ！恥ずべき事だ！君の出発についての記事が一行もない！コサックのペシコフを称賛している！彼は忠実な臣下であり、愛国者でもある！アレクサンドル・ミハイロヴィチ大公と一緒に写っている写真！たいした愛国心と祖国愛だ、アムールのブラゴヴェシチェンスクからペテルブルクまで、皇帝陛下のために走り抜けた！勲章を授与された！

クンダソワ：ああ...みんなクズだ！

ソーフィヤ：（戸口から）じゃあ、コサックのペシコフの馬は？馬にも勲章を授与したのか？（夫のそばに座る）一同大笑い。

母：もういいよ、父さん！夕食にしましょう！（十字を切る）ポーリャ！ポーリャが全員にスープを注ぐ。

父：（力いっぱいミーシャの背中を叩く）これで、子供たちをみんな世に出したぞ！自分は銅銭で学んだのに！

ミーシャ：少し静かにしてくれ、父さん！

父：これからは官職に就いて、貧乏暮らしをしないことだ。

母：アントーシェンカ、お嬢さんたちをもてなして！

レヴィタン：（座る）お嬢さんたちは俺がもてなすよ！ワニ、答えてくれ——なぜ君の家には、こんなに多くの、立派で、教養のある、優雅なお嬢さんたちが訪れるんだ？

母：彼女たちは客じゃない。家族同然よ！

イヴァネンコ：そして今、もし私が表現することを許されるなら...この食堂は、並外れた美貌の乙女によって飾られている...

アントン：死ね、イヴァネンコ、これ以上ない言葉だ！マーニャ、オリガ、リーカ！君たちには、互いの髪を掴み合う絶好の機会だ！

母：みんな私に嘘をつくんだ！マーニェチカ、人をもてなして！

アントン：僕がもてなすよ！このバルイクを食べてください、皆さん！一ポンドニルーブル七十五コペイカもするんです！このカラフトシシャモは、うっかり四十コペイカと思われるかもしれませんが、一缶六十コペイカです！飲み物は『マルサーラ』です。ミーシュカ、いくら払った？

ミーシャ：一瓶ニルーブル八十コペイカ。

アントン：女性に『マルサーラ』を振る舞うのは、なんて高くつくんだ！

マーシャ：男の子たち、やめて！

アントン：ウォッカを飲もう——男性は三杯ずつ、女性是一杯ずつ！（ウォッカを注ぐ）

ミーシャが女性たちにワインを注ぐ。

クンダソフ：失礼、私はウォッカを！

アントン：レヴィタン、君はリーカに何を囁いてるんだ？

レヴィタン：彼女を誘惑してるんだ！

アントン：無駄な努力だよ！彼女は高德の持ち主だ。（グラスを手に立ち上がる）父と母に！僕にとって最も大切な人々に！あなたがたが、私たち子供たちに教育を与えてくれたことに対して、人生の終わりまで感謝します！

レヴィタン：あなたの感動に加わります！私には自分の家も家族もありませんでした。心から、あなたの家と家族を愛しています！

イヴァネンコ：そして私は、人生の嵐の中で、ここに家族と安らぎを見出しました。

全員がグラスを合わせて飲む。

母：アントーシャがどうやって書き始めたか知ってる？私たちはあの時、貧しく暮らしていたの。もちろん、誰もができる限り働いたわ。マーシャは料理をし、洗濯をし、繕い物をした。彼女のおかげで、誰も汚れたり、しわくちゃになったりしなかった。貧しく着たけど、清潔でこざっぱりとしていたわ。私は一日中、ショールを編んで、一五コペイカで売っていたの。ミーシャは小さくてか弱かったけど、夜明け前に起きて、パンやその他食べ物を買いに店に行ったわ。お父さんは倉庫に住み込みで、主人のところで食べてた。長男のアレクサンドルはほとんど助けてくれなかった。亡くなったニコレンカはその頃もう酒を飲み始めていて、自分から食べ

に来るようになったわ。アントンは学生だった。一日中、学問を学んでいた。そして、もうすぐ私の聖名祝日なのに、お祝いのパイを作るお金がないのをひどく嘆いていたの。彼はそれを取って、物語を書いたの！物語は掲載され、数ルーブルを受け取ったのよ。（笑う）聖名祝日を祝ったわ！そしてそれ以来、彼は家族の大黒柱になったの。アントーシャの後ろは何も怖くない！お魚を取って、イサーク！

レヴィタン：ありがとう！それにキュウリも取るよ！

父：アントン、君の家族への想いが、死ぬまで変わらないことを神に祈る！

母：食べなよ、アントーシェンカ！いつになったらまともに食べられるの？

アントン：サハリンでは本物の魚を食べるよ。チョウザメを！そして牡蠣はほとんどただ同然だ！ああ、知りたいのは、僕がいなくなったら、誰が君と朝の五時まで飲み明かすのか、ってことだ、リーカ？イヴァネンコにお金がないのは、本当に良かった！さもないと、嫉妬で帰ってきたらすぐに彼を殺してしまっただろう！

レヴィタン：そうすれば、君は再びサハリンに行くことになる、今度は自費じゃなくて国費でな。

父：今日で、私がモスクワに住むようになって十四年になる。あの時も春だった。今と同じように、湿っていて寒い春だった。ただ、金は全く無かった！私は四日間、何も食べなかったんだ。エーヴォチカ、肉食を控えなさい、最後の審判のことを忘れるな！

アントン：お父さん、私は医者として、はっきりと断言する——バターは毎日お母さんに必要です！

レヴィタン：どうして、エヴゲーニヤ・ヤコヴレヴナ、あなたのところのキュウリはいつもこんなに美味しいんだ？

父：カボチャで漬けるんだ！

ソーフィヤ：素敵、素敵！あなたの食卓を見ていると、静物画を描かないのが残念に思えてくるわ！なんて豊かで、なんて色彩なの！

母：（クンダソワに）オリエチカ、あなたは全然召し上がらないわね！

クンダソワ：私のことは気にしないで！

アントン：レヴィタン、リーカの前から粉物をどけてくれ！

母：そんなこと言わないで、リーカちゃんは全然太ってないわ！今は痩せてるのが流行ってるけど、私は好きじゃない！食べなよ、リーカちゃん、彼の言うことなんか聞かないで！

レヴィタン：乾杯を許してくれ！ゴーゴリから、モスクワの本屋、コルチューギン・イヴァン・グリゴリエヴィチの言葉を引用しよう：「あのジャーナリストたちは、本に対して、まるで娘たちがプラトニック・ラブに対してそうであるように——愛してる、愛してる、でも結局何もない！」では、出発に、そして勝利の帰還に乾杯しよう！あなたの感動に！

全員がグラスを合わせて飲む。

父：モスクワの聖なる奇跡使いの祈りによって、アントーシャは生きて無事に戻ってくるだろう。もしかしたら、勲章がもらえるかもしれない！子供の頃、飢饉の時に私は櫟の樹皮と葉っぱを食べたのを覚えている。それにコレラの時にはタールを飲んだ。内用にタールだ。（ため息をつく）

ポーリヤが皿を替え、余分な食器を下に運ぶ。

アントン：戻ったら、すぐに聡明で教養のある娘と結婚するよ。そして新婚旅行で、彼女と一緒にサハリンのノートを整理するんだ！マリヤを酷使するのはもうたくさんだ！彼女に私生活を始めさせてやろう！

レヴィタン：アントン、君の周りにこれだけ美しい女性がいるのに、三十歳まで独身なのは驚きだよ！

イヴァネンコ：コリント人への使徒パウロの言葉を覚えていますか？『あなたがたに煩いがないように私は望む。妻を持たない者は主のこと、すなわち、どうしたら主に喜ばれるかを気遣う。しかし、妻を持っている者は世のこと、すなわち、どうしたら妻を喜ばせるかを気遣う。』と。

レヴィタン：俺も結婚するよ。疲れた。家族、優しさ、気遣いが欲しい。

アントン：ベドウィン、もし君がリーカをほのめかしているなら、僕は君を毒殺するよ！そして、僕がサリエリで、君がモーツァルトでも構わない。

クダソワ：分からない——レヴィタンを祝えばいいの？それとも？

アントン：なんて純粹なんだ！祝え！彼は花嫁の持参金として、マロセイカ通りの家を二軒と、十人の幼い子供をもらうんだ！

レヴィタン：あなたはどう思います、マリヤ・パヴロヴナ？

マーシャ：私は、そんなのは真面目じゃないと思うわ。あなたは女性にとっても人気があるから、あなたの未来の妻は嫉妬深くないべきよ。

レヴィタン：そうだ、女性は俺を愛する！そして俺も時々、ひどく夢中になる。しかし結婚したいのは、ただ一人だけだ。

クダソワ：そして私は今、あなたをあなたの世界に連れて行きたい。ここでは、あなたはアダムの子孫を増やし、食べ、飲み、耐え、働き、震え、笑い、泣き、眠り、そして死ななければならない。

ソーフィヤ：私からもお願いがあるの、アントン・パーヴロヴィチ。あなたはプレシヨースの近くを通るでしょう。墓地と教会、そして赤い屋根の下の丘の上の一軒家が見えるでしょう...どうか私からそれらにお辞儀をしてほしいの。悲しい調和だけど、私はあそこで一番幸せな夏を過ごしたの。私とレヴィタンはあそこでたくさん仕事をして、上手くいったのよ。

アントン：（丁寧に）必ず。甲板に出て、あなたからお辞儀をします。

レヴィタン：くそっ、なぜこの世のすべては終わるんだ？君の忌々しい面なしでは退屈だろう、ワニよ！

ミーシャ：旅は、上手くて賢い計画だ。しかし、君を見送るのは辛い！君の不在は、僕にとってとてもこたえるだろう。君はまだ去っていないのに、家はもう何かが空っぽになる。私たちの生活の秩序と調和が、目の前で崩れていく。まるで君一人が、すべての部屋を同時に占めていたかのようだ！

イヴァネンコ：そして、私はどこでも、あなたのダンスほど幸せに過ごしたことはありません！ここでどれだけお茶を飲んだことか！おそらく五ポンドは！どれだけ多くの昼食と夕食を食べ過ぎたことか！私はあなたの善意と優しさを大切にしています。困難な時にあなたは私を支えてくれました。私を滅びさせず、破滅の淵で止めてくれました。仕事を見つけてくれました。つまり、私はあなたなしではひどく寂しくなるでしょう、アントン・パーヴロヴィチ！（涙をぬぐう）

ミーシャ：我が家の牧歌は終わった！牧歌の後には、通常、ドラマが来る。

マーシャ：（涙ながらに）ミーシュカ、あなたは馬鹿よ！

アントン：（マーシャに）君と母さんは、ザゴルスクまで見送らなくていいよ。君たちはもう涙目だ。モスクワで泣き終わって、ラーヴラで繰り返さないように。

マーシャ：そうね。（クンダソワに）明後日には学校よ、オルガ、私たちの生徒たちのところに！

クンダソワ：（かなり酔っている）もしかしたら、アントン・パーヴロヴィチと一緒にキネシマまで行くかもしれないわ。

アントン：嬉しいよ。ありがとう！

クンダソワ：キネシマの溪谷で、私は誰かと会う約束があるのよ。

アントン：幸運な人を羨ましく思うよ。失礼します。十五分ほど自分の部屋へ行きます。あと数通、用事のメモを書かなければ。ありがとう、マーシャ、ローストは絶品だった。

マーシャ：ポーリャはどこかしら？片付け始めなきゃ。

アントン：ポーリャを送るよ。（階段を降りる）

ミーシャ：イヴァネンコ、ピアノを！（歌う「栄光あれ」）

イヴァネンコ：なんて声だ...

マーシャ：歌い始めたわね！なんて嫌な声！心を引き裂くわ！

皆笑う。そして、私たちは二度と食堂に戻らない。

アントンは玄関に足を踏み入れ、すすり泣きを聞く。ハンガーラックに歩み寄り、コートをかき分けて、泣いているポーリャを見つける。

アントン：ポーレンカ、世に知られざる涙はどうした？誰かに傷つけられたのか？傷つけられたのか？

ポーリャ：いいえ、いいえ...歯が痛くて。

アントン：それなら、何か対策をとりましょう！

ポーリャ：ありがとうございます、アントン・パーヴロヴィチ！もう治りました。行きます。（台所へ行く）

アントンはしばらく戸惑って立ち、それから自分の書斎へ行き、机に座る。

ベルが鳴る。ポーリャが開ける。

エフロス：（自信満々に、決然と入ってくる、ポーリャに）新しい使用人？

ポーリャ：はい。

エフロス：（二階の音に耳を澄ませる）アントン・パーヴロヴィチはいる？

ポーリャ：はい。でも、今日のご出発で、部外者はお受け取りになりません。

エフロス：（上を指して）あそこは誰？彼の声が聞こえないようだが？

ポーリャ：アントン・パーヴロヴィチは書斎にいらっしゃいます。

エフロス：一人か？

ポーリャ：はい。

エフロス：マリヤ・パヴロヴナは？

ポーリャ：お客様と二階にいらっしゃいます。今お呼びしましょうか。

エフロス：いい！（ポーリャに金を押し込む）これを受け取って！そして誰にも何も言うな！アントン・パーヴロヴィチは私を待っている！（外套も脱がずに、素早く、ノックもせずにアントンの書斎に入る）

アントン：（驚いて）ドゥーニャ？

エフロス：今日のあなたの世界観はどう？何行書いた？一行いくら？あなたの手紙を取りに来たの！心配しないで、誰にも見つからないわ！あなたの使用人に三ルーブルを口止め料としてあげたわ。ところで、偽札よ！私の兄弟、ユダヤ人が完璧に描くの。完全な偽装よ！なんで幽霊でも見るように凝視してるの？目が飛び出るわよ！早く手紙をちょうだい！さもないと、忌々しいマーシュカが嗅ぎつけるわ！何にでも首を突っ込んで！そして今の私は、あいつに我慢できないの！（無礼に、熱狂的に、アントンの書類を自分で掻き回し、散らかす）

アントン：どうして君はいつも怒ってるんだ、短気な生き物よ！写真をくしゃくしゃにするな！鉛筆を折るな！僕に散らかしを働くな！これが君の手紙だ！持って行こうと思ってたんだ。

エフロスは手紙をざっと目を通し、暖炉に投げ込む。

エフロス：幌馬車で揺られるがいいわ！氷にはまり込め！自分が偉大な作家だという陶醉で凍え死ね！シンガポールの女から性病をもらえ！旅行が終われば、あなたはもはや丸い、ではなく、世界一周の馬鹿になるわ！

アントン：君が四年前に僕と結婚するのを断ったのは無駄だったな。今ごろはとっくに離婚してただろう！しかし、一緒に過ごしたあの一年か二年の間に、君は何と多くの嫌味を言えたことか！

エフロス：あなたと結婚？素晴らしく考えたわね！でも、あなたは内縁の結婚が両親を悲しませるって、そんなに心配してたじゃない！あなたの考えでは、私は正教を受け入れ、一銭もなくなるべきだったのね？父は私の財産を剥奪しただろう！でも、あなたの妻になる名誉に比べたら、そんなことは些細なことよね！あなたの家族全員と一緒に暮らすの！貧乏でも構わないわ？新婚旅行は通り抜けの部屋で！夏はウクライナ人の汚い農場で休むの！マーシャとあなたのお母さんに、あなたのシャツを縫ったり、料理をしたりするのを教えてもらうのよ！半年かけて新しい帽子を買うお金を貯めて、そのことで家族全員と相談するのよ！私は、偉大な作家の妻になるという、失われた機会を惜しみ始めてるわ！

アントン：惜しみ始めてる？まだ遅くないぞ、ドゥーニャ！

エフロス：ご覧の通り、私はあなたのために自分の馬を手放せないの！そして休暇は海外で過ごすのが好き！私はおしゃれな女なの！そしてマーシャのように安っぽくておかしい格好はできないわ！私は、お金を数えず、誰にも遠慮せずに、自分のためにお金を使うのに慣れてるの！（突然黙る）

アントン：知ってるか、ドゥーニャ、僕の兄イヴァンが、ある体操科生の作文に『ナンセンス』と書いたら、そいつがラテン語で『レニクサ』と読んだんだ。君の言うことは全部レニクサだよ。ところで君は、美しくなったし、性格も少し穏やかになったね。

エフロス：アントン、アントン！全部、つまらないこと、たわごとよ！私は十分なお金があるわ！全部くそくらえにして！どこかへ行かない？海外へ！パリへ！

アントン：レニクサだ。君は相変わらず夢想家だな！

エフロス：なぜ、なぜ私たちは二人とも不幸なの？何のために？ええ、あなたは自分を間違えなかった！あなたは今や有名よ！でも相変わらず、みすばらしい環境に住んでる。玄関はキャベツのスープの匂いがする。なぜ

そんなふう生きてるの？あなたはそんなに緊張した精神生活を送って、たくさん苦しみ、苦しみ続けてるのに、せめて外見だけでも快適さに囲まれるべきよ！おや、あなたのドラゴンたちが私をにらんで、噛みつこうとしてる！（燭台を手袋をはめた手で叩き、手を引っ込める）でも！でも、でも！くそっ！手袋を焦がしたわ！（手袋を脱ぎ、床に投げる）私の紐！あなたは今でもそれを持ってるの！返さない！（アントンの首から紐を引っ張る）

アントン：怒りんぼう！放せよ！（自分で外し、彼女に投げ、首をさする）首を絞められるところだった！この輪は、君が与えることのできる幸せの象徴だ。

エフロス：さようなら！私は相変わらず狂ったようにあなたを愛してる！くそったれが！（素早く書斎を去り、玄関のドアへ走る）

アントン：（後を追って）ドゥーニャ！

エフロスは急に立ち止まり、走って戻り、彼の腕の中に飛び込む。長いキス。非常に長い。

二階の階段にリーカが出てくる。見てしまう。両手を口に当てる。それから、ほとんど倒れそうになり、手すりに掴まる。立って、彼らを見つめる。

リーカは気づかれなかった。エフロスはアントンを押しのけ、走り去る。

アントンはリーカに気づき、悲しそうに両手を広げ、自分の部屋へ戻る。

リーカは一階に駆け下り、慌てて自分の肩掛けを探すが見つからない。

アントンは書斎で手袋を拾い上げ、見つめ、キスをし、暖炉に投げ込む。

マーシャ：（階段の上から）リーカ？誰か来たの？

リーカは答えず、姿も見せない。

マーシャ：ポーリャ！

レヴィタン：（マーシャの後を追って出てくる）マリヤ・パヴロヴナ、返事を待ってます。

マーシャ：私を正しく理解してください。私はアントン・パーヴロヴィチの慣れた生活様式を乱すわけにはいきません。彼にとって必要な秩序を奪うわけにはいきません。彼のためにいつも作り出そうとしている創造的な環境を奪うわけにはいきません。私はできません！私は彼に不愉快な思い

をさせるわけにはいきません！私の人生は彼のものであり、他の誰のものでもありません。

レヴィタン：（口笛を吹く）敬服し、撤退する。

再びミーシャの歌声。

マーシャ：（客間に向かって叫ぶ）ミーシュカ、もうたくさん！我慢できない！（一階に下りる）

ソーフィヤ：（レヴィタンに近づく）一つだけ答えて——あなたは私を完全に捨てたの？

レヴィタン：疲れたんだ。

ソーフィヤ：それはどういう意味？私を苦しめないで！（彼の手を掴み、キスする）あなたは私の小説の最後のページよ！

レヴィタン：（小声で）自殺するよ。三度目の自殺だ。君たちはみんな、それを望んでるのか？（客間に戻る）

ソーフィヤは階段の段に座り、手すりに頭を乗せる。

マーシャは玄関の真ん中に立ち、指でこめかみを押さえ、「ああ、神様、神様...」と繰り返す。リーカに気づき、すぐに彼女のところへ行く。

マーシャ：隠れてるの？どうしたの？何か悲しんでるの？どうして一人でここにいるの？

リーカ：帰るわ。歯がひどく痛くて。

マーシャ：なんて残念！今日なのに！兄のイヴァンとアレクサンドルも、あなたに会いたがってたわ。もうすぐ着くわ。あなたはすっかり大人になったわね、リーカ！半年前まで、あなたはあんなに可愛くて、あなたの年少組に言ってたわね：「お嬢さんたち、しーっ...お嬢さんたち、しーっ...」。私はあなたを兄たちに見せたくて、あなたを呼んだのよ。

リーカ：その時、あなたがあのチェーホフの妹だなんて、知らなかったわ！

マーシャ：いつもの内気さで、あなたは部屋に入らず、まさにここに残ったのね。私はあなたに貸す本を取りに二階へ上がり、途中でミーシュカに言ったの：「ものすごく美しい娘を連れて来たわ。でもとても内気で、毛皮のコートの後ろに隠れてるの」。ミーシュカはゆっくりと階段を下りたり上ったりして、あなたをじろじろ見ようとしたの。

リーカ：（笑う）私は恥ずかしさで泣きそうになり、本当に誰かの毛皮のコートの後ろに隠れたわ。

マーシャ：でもミーシュカはあなたを見つけたわ。アントンのところへ行って報告したの：「マリヤのところに、とても可愛い娘が来てて、玄関に立ってるよ」。アントンは仕事を放り出して、ゆっくりと二階へ上がったわ。ミーシュカが後ろから。それから下りて、また上がった。

リーカ：私は必死にハンガーラックに身を押し込んでたわ。

マーシャ：彼らは十回くらい行ったり来たりして、あなたを見てたわ。

リーカ：私は立って思ったの——なんて恐ろしい、この家には男が多すぎる！そしてどうして彼らはいつも階段を行き来するんだろう？

二人は笑い、抱き合った。

リーカ：こうしよう、アントンの後を追って行くわ！どこかチュメニあたりで誘惑して、結婚してやるの！あのサハリンなんてくそくらえにして！そしてそのままセイロンへ新婚旅行に行くのよ！

マーシャ：（大笑い）そういう計画は君だけじゃないと思うわよ！クンダソワは、どこまでか分からないけど、アントンに付き添うつもりでいるのよ！あなたたち、お互いの目をえぐり合ったりしない？

リーカ：私は気が弱いから、争わずに負けるわ！声楽を学ぶつもり。私は滅びてるの、マーシャ！誓って、滅びてるの！

マーシャ：リークシャ、もう、もう...何をそんなに取り乱してるの？

リーカ：（ヒステリーに近い）私は滅びてるの、マーシャ、滅びてるの！あなたは自信家で、賢い...助けて、滅びるのを！助けて、どうすればいいか教えて！

マーシャ：しーっ、お嬢さん、しーっ...それは神経衰弱で、それだけよ。気分の問題よ。

リーカ：私は滅びてるの、マーシャ、滅びる予感がするの！

マーシャ：すべてうまくいくわ。あなたは若くて、美しくて、素晴らしい声を持ってる！あなたは有名な歌手になるわ！そして私はあなたと知り合っていたことを誇りに思うわ。ただ、もっと性格と意志を持って！ボヘミアに夢中にならないで！自分自身を磨きなさい、そしたらあなたの未来は

開けるわ！あなたの未来は、あなたの手の中にあるの！すべてうまくいくわ！

リーカ：私は滅びてるの、マーシャ。

書斎からアントンが出てくる。

マーシャ：（リーカに）しーっ、お嬢さん！（アントンに）リーカの歯の痛みを話してたのよ。痛くて、リーカは帰るところだったわ。

アントン：私は医者かどうか？私がまだ学生で、夏にヴォスクレセンスク病院で実習していた時、歯の病気の患者が来た。私は元気よく、自信満々に鉗子を当て、多少の拷問の後、かなり立派に...健康な歯を抜いたんだ！「何も、何も、と現地の医者は私を励ました、健康な歯を抜け、いつか病気の歯にもたどり着くだろう！」私は病気の歯を抜こうとした。しかし、健康な歯よりもうまういかなかった。歯冠を折った。患者は皆を罵り、去っていった。

マーシャ：その思い出でリーカが元気になるとは思えないわ。

アントン：大丈夫。持ってきてくれ、マーシャ、脱脂綿か、バレリアンか、ウォッカを。リーカが完全に片目を失明して、涙で家を水浸しにする前に。

マーシャは二階へ上がり、クフシンニコワのそばを通る。

クフシンニコワ：（マーシャに）あなたの家はいいわね。静かで、眠そうで、田舎みたい。情熱なんて何もない。

リーカ：（気まずい沈黙の後、アントンに）ああ、私ももうおばあさんになりたいわ。クフシンニコワみたいに！

アントン：なぜだい？今のままの君は、とても愛らしいよ。

リーカ：私は自分取るに足らない、空虚で、誰にも必要とされていないと感じてる！ああ、なぜガルシンが自殺し、ドストエフスキーが流刑地に行き、レヴィタンがいつも憂鬱なのか、理解したいわ...そしてあなたはサハリンへ行くの？

アントン：私は今、ひどく疲れている。そして今、君に何か役立つことを言える状態じゃない、リーカ！サハリンが私の思考と時間のすべてを奪ってしまった。そして、そのどちらも、今は自分の意志で使うことはできない。それに加えて家族——問題、妹——問題、ミーシュカ——問題！私の

私生活——千の問題！そして一つの答えもない！私は自分が冴えなくて、重いと感じている。

少し待ってくれ、リーカ、辛抱してくれ！そして私たちは、今自分たちに何が起きているのか、すべてを理解し、すべてを解決するだろう！私たちはまだ若い、リーカ！そして、私たちはまだ長く生きるだろう...サハリンが、私に、願わくば、元気と、自分の使命への信念を与えてくれるだろう。行かないでくれ、リーカ、寛大であれ！君の愛しい顔が、見送る人々の中に見えなければ、僕は寂しく出発することになるだろう！

マーシャ：（戻ってくる）さあ、ご要望の品です、医者様！治療に取りかかってください！私はミーシュカを馬車を呼びに行かせるわ。リーカを家まで送らせて。

リーカ：ありがとう、マーシャ、必要ないわ、残るわ。残るわ...

—— 終幕 ——